

研究紀要 21

目 次

人面装飾付釣手上器の再検討	渡辺 誠 1
甲斐と河内と馬	末木 健 7
甲斐国山梨郡・八代郡・都留郡における古代牧についての一視点	今福 利恵 13
山梨県の中世石仏 —地蔵塚地蔵石仏—	坂本 美大 38 (1)

序

このたび、山梨県立考古博物館ならびに山梨県埋蔵文化財センターの日頃の研究成果の一端を掲載した『研究紀要』第21号を刊行する運びとなりました。

今回は、4篇の論文と資料報告を掲載しております。

末木 健「甲斐と河内と馬」は、甲斐国と河内国との深い関連性について「地名」「古代氏族」「国司」「馬」などの多方面から論述し、倭王權の甲斐国への政治的・軍事的な影響を考察したものであります。

今福利恵「甲斐国山梨郡・八代郡・都留郡における古代牧についての一視点」では、諸説ある古代甲斐国の大牧について山梨郡・八代郡・都留郡下の様相を『甲斐国志』村里部の牛馬数を村毎にデータ化して考察したものであります。

坂本美夫「山梨県の中世石仏－地蔵塚地蔵石仏－」は、地蔵石仏の安置場所である占墳石室の奥壁に彫られた年号を手がかりに、地蔵塚地蔵石仏の制作年代、特に県内でその確認例がほとんど知られていない、中世のうちでも前半代に造られた地蔵石仏なのか否か検討を加えたものであります。

渡辺の「人面装飾付釣手土器の再検討」は、本県を中心とする縄文中期文化の特質の一端に言及したものであります。

上記4篇の論考が考古学研究並びに埋蔵文化財の普及啓蒙活動の進展に少しでも貢献できるとすれば、望外の喜びとするところであります。

県立考古博物館と埋蔵文化財センターは、設立されてから、今年で23年目を迎えております。山梨県における埋蔵文化財の調査体制と保護行政は大きく前進しましたが、なお、課題の多いこともあります。今後とも努力をかさね、より一層の充実をはかる所存でありますので、些少にかかわらず、各位からのご教示と忌憚のないご批判を賜りますようにお願い申し上げます。

2005年3月31日

山梨県立考古博物館館長
山梨県埋蔵文化財センター所長

渡 辺 誠

人面装飾付鉤手土器の再検討

渡辺 誠

1. はじめに
2. 分布の問題

3. 機能の問題
4. おわりに

1. はじめに

筆者は人面・土偶（人体文を含む）装飾付上器のうち、すでに深鉢形土器・鉤手土器・注口土器について、その基礎資料の集成と若干の検討を行なってきた¹⁾。これらのうち鉤手土器については1995年に発表し、その後すでに10年を経過している。この間に当然ながら資料は若干増加している。また見落としもあった。本稿ではそれらの新資料などに基づいて再検討を試みることとした。検討の対象は次の2点である。第1は分布の問題、第2は機能の問題である。2点とも旧稿を訂正するものではなく、むしろその性格が一段と明らかになったことができる。

2. 分布の問題（図1）

旧稿では10例が知られていた。本稿ではこれに8例が追加される。旧稿の10例は次のとおりであり、すべて長野県下の出土例である。

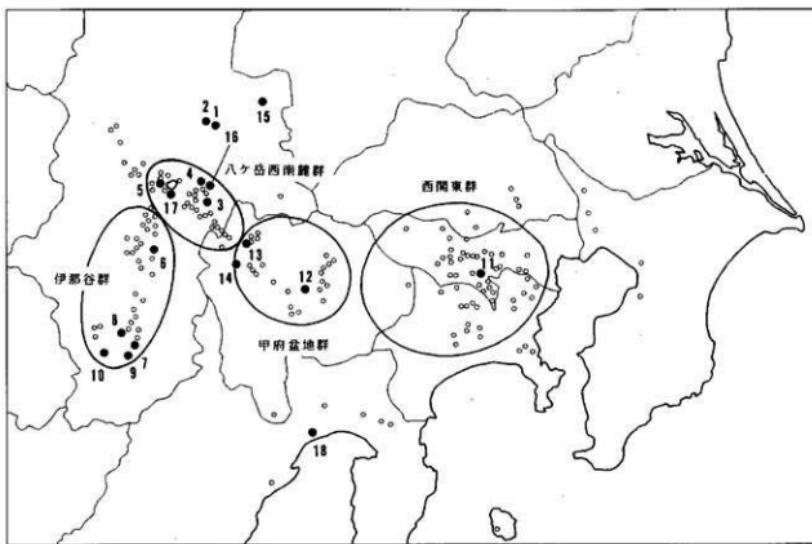
1. 長野県北佐久郡立科町芦田遺跡
2. 同 小県郡長門町中道遺跡
3. 同 諏訪郡原村前尾根遺跡
4. 同 芽野市湯川上の段遺跡
5. 同 岡谷市海戸遺跡
6. 同 伊那市御殿場遺跡
7. 同 下伊那郡喬木村城本屋遺跡
8. 同 飯田市北山遺跡
9. 同 飯田市坪外遺跡
10. 同 飯田市箱川原遺跡

増加の8例は、長野県を含めさらに山梨県・東京都・静岡県にまで分布範囲を拡大している。本稿では旧稿との違いを明らかにする意味で両者を混合せず、通し番号を付することにする。これらを東寄り順に記せば次のとおりである。

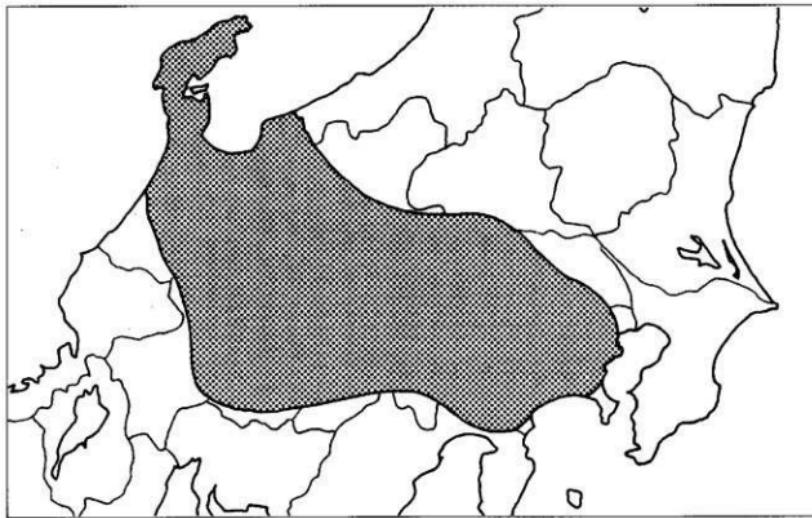
11. 東京都八王子市多摩ニュータウンNo.796遺跡例（写真1）
- 東京都埋蔵文化財センターの発掘資料。第7号住居址で、入り口よりみて左奥部床面より出土²⁾。
- 鉤手部分の破片のみで、鉢部分は復原である。復原高

21.2cm。頂部の人面は縦長で、長い隆帯で示される鼻の下に大きな口がみられ、鼻筋上の沈線、頬の列点も特徴的である。目のまわりは沈線が一周している。その上の眼窓上隆起は小さく、簡素な表現である。加曾利EII式期。

12. 山梨県笛吹市（旧東八代郡境川村）金山遺跡例（写真2）
旧境川村教育委員会による発掘資料。住居址覆土より出土³⁾。
底部は欠失し復原されている。大型で復原高48.6cmであり、人面部でも高さ12.1、幅17.6cmである。この人面部がすべて欠きとられていて、特徴的である。女神の死を象徴的に示しているところの、人面装飾付深鉢形土器に共通している。褐色～黒褐色を呈す。曾利I式期。
13. 同 北杜市（旧北巨摩郡高根町）社口遺跡例（写真3）
旧高根町教育委員会による発掘資料である。第13号住居址床面壁際より出土⁴⁾。
高さ20.5cm。人面は小さく、隆帯で鼻と眉を表現し、裏面にも同様な人面がみられる。褐色を呈す。曾利II式期。
14. 同 北杜市（旧北巨摩郡武川村）真原A遺跡例（写真右）
旧武川村教育委員会による、発掘資料である⁵⁾。
小型で、高さ15.5cm。頂部の両面に凸字状に人面がみられる。最頂部は欠失しているので眼窓上隆起は残っていないが、その下の目は横位の沈線2本で表現されている。隆帯で示される鼻は2孔をもち、その下の口は、目と同様な沈線1本で表現されている。黒褐色を呈す。曾利II式期。
15. 長野県北佐久郡御代田町宮平遺跡例（写真5）
御代田町教育委員会による、未報告資料である⁶⁾。
j-33号住居址覆土より出土⁶⁾。
高さ27cm。大きな鼻の両脇の渦巻文は、目とみることができる。2個の鼻孔も大きく、その下に、口に相当するかのように縦の沈線がみられる。褐色を呈す。曾利II式期。
16. 同 芽野市聖石遺跡例（写真6）
長野県埋蔵文化財センターの発掘による、未報告資料。



第1図 人面・土偶装飾付深鉢形土器IV類（○）と同釣手土器（●）の分布（遺跡名は本文参照）



第2図 釣手土器の分布（註10文献より）

住居址内伊奥のピット中より出土。曾利Ⅲ式期。

小型で、高さ15.3cm。人面は横長で、中央に大きな鼻の隆起があり、これとは対照的に、小さな目が刺突

文でつけられ、鼻の下に縦の沈線で口が表現されている。両端には、耳飾を表す渦巻文がみられる。

17. 同 谷汲市荒神山遺跡例（写真7）



写真1 多摩ニュータウンNo.796遺跡例



写真2 金山遺跡例

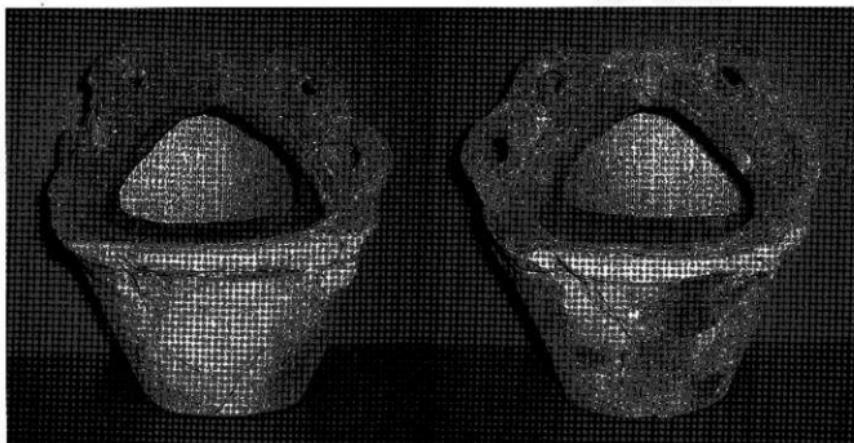


写真3 社口遺跡例（旧高根町教育委員会）

長野県埋蔵文化財センターによる発掘資料。第96号住居址床面より出土。釣手部の破片で、残存する高さだけでも23cmあり、本來大型であったことがわかる。眼窓上隆起はV字状を呈して鼻も表現している。同じような粘土紐で丸く目も表現しているが、口の部分ははがれていて不明である。褐色を呈す。井戸尻II式期。

18. 静岡県榛原郡富士川町破魔射場遺跡例（写真8）

静岡県埋蔵文化財調査研究所による発掘資料。第3号住居址床面より出土。最頂部は欠失しているのが、高さ15.5cm。眼窓上隆起は横位の沈線2本で表現されている。鼻部の隆起は欠失しているが、目と口は丸く粘土紐で表現されている。赤褐色。曾利III式期。

以上の8例は、ほとんど中期後半（後葉）の曾利I・II式期に属す。そのなかで荒神山遺跡例は井戸尻II式期に属す。

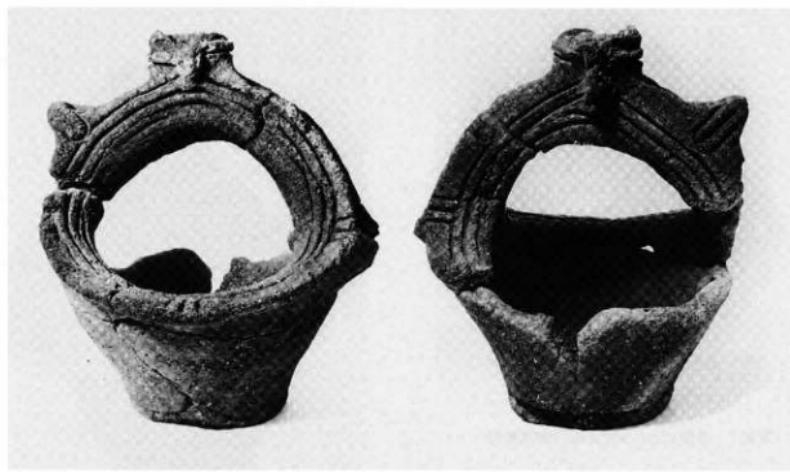


写真4 真原A遺跡例

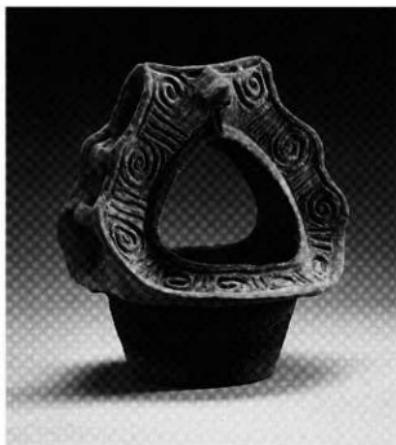


写真5 宮平遺跡例（堤 隆氏提供）



写真6 聖石遺跡例

しやや古く、逆に破魔射場遺跡例は曾利Ⅲ式期に属しやや新しい。

また旧稿ではその分布は長野県に限られていたが、今回の集成では山梨県を中心とした西関東から長野県にかけての範囲となり、人面装飾付深鉢形土器のもっとも発達したIV類と時期も近接し、分布も一致していることになった。

IV類は西関東群・甲府盆地群・八ヶ岳西南麓群・伊那谷群とに分けられるが、旧稿では後2群に4例ずつ分布して

いた。今回の資料を加えると、伊那谷群には増加はみられないが、各群はそれぞれ1・4・8・5例となる。後2群に多い傾向は変わらないとはいえ、IV類の範囲に近づいたことは、IV類と深い関係にあることが明らかになったが、釣手土器全体の分布（第2図）¹⁰⁾と比較すると、富山・石川県下では人面装飾付釣手土器はみられない点が問題で、将来の類例発見を期待しておきたい。なお本稿では、静岡県破魔射場遺跡例・長野県宮平遺跡例は、それぞれ甲



写真7 荒神山遺跡例（長野県教育委員会提供）



写真8 破魔射場遺跡例

府盆地群・八ヶ岳西南麓群に含めておくこととする。

3. 機能の問題

釣手土器は、故藤森栄一氏以来灯火具とみられていて、特に異見はみられない。しかしその内面には、意外と比熱や煤の痕跡が顕著ではない。長野県伊那市御殿場遺跡の釣手土器（写真9）について、飯塚景美・渋谷昌彦氏のご好意でその内面を詳細に観察したことがあるが、驚いたことに外側の前面が黒く焼けているのに対して、内面には火を受けた痕跡はまったくみられなかった。

この土器は身体に火を宿し、それによって身体を焼かれて人間にとって大切な火・食物などを生み出す女神の存在を示しているという。吉田敦彦氏による重要な指摘が行なわれて以来、人面・土偶装飾付土器研究の方向を決定した、学史的にも重要な資料である。

したがって内面に被熱痕がみられないことは一見矛盾するが、これを統一的に理解するためには、内部で火をともすことのほかに、松のような油脂の多い細木を突き刺すことを想定するしかない。そしてそれは聖婚を示唆し、死と再生を司る女神にふさわしい行為とも考えられる。このように考えた方が、単に祭りの時に火をともすとするより、祭りの所作を示唆してくれる。

このように考えてみると、大晦日の夜に志摩地方で行なわれる、大勢の青年らによって直径2mの輪を激しく空中に突き上げるゲーター祭り（写真10）や、初夏に神社で行なわれる茅の輪潜り、さらには善光寺の胎内めぐりなども、死と再生の考えが共通しているとみられ、縄文的な祭りと考えられてくる。

これらを踏まえて、縄文文化の基層文化としての位置づ

けを一層明らかにしていきたいものである。

4. おわりに

考古学において精神世界を探ることには困難がある。しかし從来からの土偶などに加えて、人面・土偶装飾付土器においてもその系口がつかめるようになってきたのであり、個別の徹底した観察に基づいて課題の研究を深めていきたい。その地域として、山梨県が大きな役割を果たす一角を占めていることは幸いなことである。

註

- 1 a 渡辺 誠「人面装飾付の釣手土器」『比較神話学の展望』青土社 1995年
- 1 b 渡辺 誠「人面装飾付注口土器と関連する土器群について」『七社宮』福島県浪江町教育委員会 1998年
- 1 c 吉本洋子・渡辺 誠「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』第1号 1994年
- 1 d 吉本洋子・渡辺 誠「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究（追補）」『日本考古学』第8号 1994年
- 2 佐藤 攻「多摩ニュータウン遺跡-No.72・795・796遺跡-」『東京都埋蔵文化財センター調査報告』第50集 1998年
- 3 林部 光「金山遺跡・Ⅲ」1995年
- 4 吉本洋子・渡辺 誠「目鼻口を欠く人面装飾付深鉢形土器」『山梨県考古学協会25周年記念論文集』 2004年
- 5 雨宮正樹「社口遺跡発掘調査報告書」 1996年
- 6 坂口広太「武川村真原A遺跡住居跡の配石構造について」『八ヶ岳考古』第12号 2004年
- 7 堀 隆也「御代田町史」史料編 2002年



写真9 御殿場遺跡例

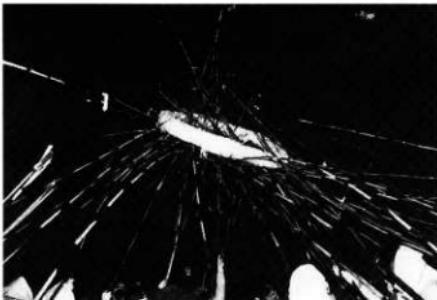


写真10 ゲーター祭り（石原義剛氏提供）

- 8 松永満夫他『長野県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』諫訪市・その3 1975年
9 井鍋哲之他『富士川S A関連遺跡』『静岡県埋蔵文化財研究所調査報告』第123集 2001年
10 宮城孝之『縄文土器時代中期の釣手土器』『中部高地の考古学』 1982年

謝辞

本稿をまとめるに際しては、次の方々から多くの御教示と御高配を仰いだ。末尾ながら銘記して深謝の意を表する次第である（五十音順、敬称略）。

雨宮正樹・飯塚政美・石原義剛・市沢英利・大倉潤・大竹憲治・小野正文・亀割均・栗野克巳・五味一郎・坂口広太・佐野隆・渋谷昌彦・竹尾進・丹野雅人・長沢宏昌・野崎進・林部光・柳沢亮・若月正巳・浅間縄文ミュージアム・静岡県埋蔵文化財調査研究所・東京都埋蔵文化財センター・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター・旧明野村境川村教育委員会・旧境川村教育委員会・旧武川村教育委員会・諫訪市博物館・富士川町教育委員会

甲斐と河内と馬

末木 健

はじめに

- 1. 地名
- 2. 古代氏族

3. 国司等

- 4. 馬と甲斐
- まとめ

はじめに

甲斐は急峻な山々に囲まれた国で、万葉集にも「なまよみの甲斐」と歌われるほど、彼の世とこの世をつなぐ、気のこもれる国として、古代の都の人々から遠い存在であった。しかし、一方では『古事記』『日本書紀』には、ヤマトタケルの東征伝説にあるように、ヤマト朝廷の前進基地として「酒折の宮」が置かれた記事が見えるなど、4世紀～5世紀の一時期には畿内の勢力が及ぶ最も東に位置していた可能性のあることが、考古学的な資料でも確認されている。

その最大の遺跡は、東八代郡中道町にある国指定史跡「甲斐銚子塚古墳」であり、1世紀後半の前方後円墳としては、東国最大規模を誇っている。また、近接する同町の大丸山古墳は、銚子塚古墳に先立つ4世紀中葉に比定されるが、石室内部からは最古式の鉄製短甲や手斧など、大陸での製品と判断される貴重な出土品があり、東日本における4世紀での甲斐国の政治的・軍事的役割の高さを示している。

また、近年にはその中道町東山2号方形周溝墓の溝から、4世紀末の土器と同じ地層に馬の歯や骨が出土し、統いて甲府市塙部遺跡SY3・SY4方形周溝墓の溝からも4世紀後半代の馬齒が出土したこと、大陸からの馬の導入が全国でも遅く甲斐国にもたらされた可能性が高まっている。

この背景には、大陸における西晋の滅亡と五胡十六国時代の始まりや北魏の建国、日本軍の朝鮮半島南部への進出など、軍事的な緊張があり、畿内大和政権は馬の軍事的な活躍を目の当たりにしたであろう。それが、日本での本格的な馬の飼育の導火線となったことは想像に難くない。

甲斐の馬は大陸から直接甲斐へ輸送されたことは有得ないことであり、韓半島から北部九州、西日本、畿内を経由して甲斐に至ったと考えるのが当然ではないかと思っている。畿内からは東海道か東山道を経由して甲斐に至るのが通例であると思われ、『記紀』における前述のヤマトタケル伝承でも、これらの道が東征や帰路の道として記述されている。

ところが、近年、山梨の4世紀代における土師器の觀察から、東海系の土器だけでなく山陰・北陸系の土器が多数出土することが分ってきた。このため、甲斐への馬の伝播ルートが①東海道、②東山道—甲斐、③北陸道—東山道—甲斐の3つのルートを考える必要がてきた。

また、大陸からの馬の伝来については『日本書紀』応神天皇15年8月条に、百濟王から良馬2匹が献上され、その馬を經（奈良県橿原市大軒町付近）の坂上の厩で養ったという。更に、履中天皇の時には河内飼育（かわちのうまかい）の記事が『日本書紀』にみえ、馬氏の本拠地である河内国占市郡において馬飼部が設置されていた。馬に関する『記紀』の記述では雄略天皇や欽明天皇の代が最も多く、とりわけ「甲斐の黒駒」は雄略天皇の時で名高い。

「甲斐の黒駒」伝承や馬の飼育に関する渡来系氏族の田辺史氏、馬史氏等が奈良時代に甲斐國司として赴任するなどのことから、甲斐國と馬と河内國の関係はそれだけ取り上げても興味ある関連が導き出せるのではないかと考え、ここでは「地名」「氏・人」「国司」「馬」などについて甲斐と河内との関連性について述べ、その意味を探ってみたい。

1. 地名

甲斐は山深い国であり、主に弥生時代後期になって甲府盆地内部やその周辺が開発されて水田が開かれた。従って、古墳時代の甲府盆地では盆地東部から東南部にムラや初期の大古墳が多く、次いで盆地北部から西部に後期のムラや古墳があり、八ヶ岳山麓や県東部の大月市・上野原町では後期のムラや古墳が散見するにすぎない。このような甲斐国の大古墳地図は、坂本美夫によって評・里（郡・郷）の成立とからめて説明されている（坂本美夫 1983「甲斐の郡（評）郷制」『研究紀要』1 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター）。

『和名抄』によれば山梨の古代郡・郷地名は下記の通りである。郡・郷の地名の由来には「土地や地形」から命名されたものや、「人・氏族・集団」などに関わるもの、「仕事や用途」に関わるもの等が想定されるが、その多くは根

掲が不明であるので、ここでは名称をあげるにとどめる。

甲斐国郡郷名

- ・山梨郡（東部） 於曾（おぞ） 能呂（のろ） 林部（はやし） 井上 玉井
- ・山梨郡（西部） 右禾（いさわ） 表門（うわと） 山梨 加美（かみ） 大野
- ・八代郡 八代 長江（ながえ） 白井 沼尾（ぬまのお） 川合（かわい）
- ・巨庭郡 等々（どうどう） 速見（へみ） 栗原 青沼 真衣（まさの） 大井 市川 川合 余戸（あまりべ）
- ・都留郡 相模（さがむの） 古郡（ふるごおり） 福地（ふくち） 多良（たら） 賀美 征茂（せも） 都留（つる）

次ぎに、河内国の古代郡・郷は下記の通りである。

河内国郡郷名

- ・錦部（にしごり）郡 余戸・百済
- ・石川郡 佐備・紺口・雜居・大國
- ・古市郡 新居・尺（？）度・坂本・古市（八上（やかみ）郡）
- ・安宿（やすかべ）郡 賀美・尾張・資母（しも）
- ・大県（おおあがた）郡 鳥坂・鳥取・津積・大里・巨庭（式内社大猪神社）・賀美
- ・高安郡 坂本・三宅・掃守・玉祖
- ・河内郡 英多・新居・桜井・大宅・豊浦・額田・大戸
- ・讃良（さらら）郡 山家・甲可・枚岡・高宮・石井・茨田（うはらた）郡 輛多・佐太・三井・池田・茨田・伊香・大窪・高瀬
- ・交野（かたの）郡 三宅・田宮・園田・岡本・山田・葛葉
- ・若江郡 弓削・刑部・新治・巨庭・川俣・錦部・余戸（郡下に式内社弓削神社・矢作神社）
- ・渋川郡 竹淵・邑智・余戸・跡郎・賀美（郡下に式内社群麻神社）
- ・志紀郡 長野・拌志・志紀・田井・井於・邑智・新家・土師
- ・丹比（やじひ）郡 依羅・黒山・野中・丹上・三宅・八下・田邑・菅生・丹下・土師・狹山

甲斐と河内の2国に共通する郡・郷名は「巨麻」「賀美」「資母」である（＊余戸は除く）。このうち、「巨麻」は河内国に郷名として2郡に見え、「賀美」郷も郷名として3郡に見える。「資母」は「しも」と読み甲斐国郡都留郡「征茂」郷と共通し、「上・下」の関係を示したものと思われ、漢字表記を慶賀な文字を使い2字としたものであろう。

「巨麻」は高句麗に由来する事が閑見氏（閑見 1959 「甲斐の母化人」「甲斐史学」7）により既に説かれている。河内国大郡都巨麻郷・若江郡巨麻郷は、いずれも高句麗系渡来氏族大猪連（猪連）の本貫地であることから、甲斐の「巨麻郡」も高句麗に由来するという説は定説となっている。

る。なお、甲斐国の大麻郡の成立時期は文献上不明ながら、多くの高句麗系渡来人の居住によって成立したとすれば、高句麗の滅亡（668）前後に日本に亡命した人々の移住によって成立し、しかも、馬飼育に長けた人々であったことが、8世紀以降の甲斐の牧の成立に大きな影響を与えたことは想像に難くない。この牧の成立が、4世紀末以来の山梨・八代地域の小牧の統一・移設につながってもいたんだろう。

なお、河内国の式内社と同名の神社は「延喜式」甲斐国では八代郡の弓削神社がある。この神社は現在西八代郡市川大門町に所在するものであろう。「日本後記」には「甲斐国巨麻郡弓削社」の記載があり、市川郷は「和名抄」で「巨麻郡」に属していることから、のちに郡の領域に変化があったものと推定されている。

このように、同名の郡・郷である「巨麻」などは高句麗の氏族を命名の根拠とし、甲斐と河内の関係を高句麗・泊氏を間につなぐことが可能であるが、「賀美」「資母・征茂」などは地理的な関係を表すことが多く、甲斐と河内を直接つなぐものの判断は困難である。「弓削神社」は弓削連など同族に属する神社であり、河内からの出自を想定するに十分であろう。なお、笛吹市一宮町の「上久作・下矢作」の地名も河内を本貫とする「矢作造・連」との関わりを想定できるが、次に説明する様に甲斐国矢作部は都留郡を本拠地としている。

2. 古代氏族

次に甲斐国の大古代氏族と河内氏族との関係を見たい。氏族・部民の名は①王・妃・王子等の名や宮号を付したもの、②職業内容を名称としたもの、③中央氏族の氏族名を付したものに分けられる。甲斐国には①に日下部・三枝部（直）、小長谷部、壬生部があり、②に矢作部・丈部、倭文部、弓削部が存在又は想定される。③は物部・大伴部・丸部、当麻部、漢人部・上村主（直）がある。これらの管理者や支配者が河内国にかかわりある部を抽出すると以下の通りである。

○ 日下部（日下部直）

「古事記」開化天皇段に「甲斐国造が中央氏族である日下部連と同祖」とされており、甲斐国造の氏族と見られている（閑見 1963 「甲斐国造と日下部」「甲斐史学」）が、同書仁徳天皇段には、天皇の子の大日下王・若日下部命（『日本書紀』では大草香皇子・草香幡楼原女）兄妹のために大日下部・若日下部を置いたとされる。草香幡楼原女は雄略天皇の皇后となり、雄略天皇が5世紀後半に皇后の草香幡楼原女（くさかのはたびのひめこ）の所領として最終的に設定・確立したと見られている。仁徳天皇の大古墳、雄略天皇陵（丹比高鷲原陵）は河内国に比定されており、日下部連の本拠も河内国との関わりが強いと考えられる。

なお、雄略天皇=草香幡楼原女=日下部連=甲斐国造という結びつきは、雄略天皇13年9月条の雄略天皇と甲斐の

黒駒伝承からも、甲斐=黒駒=雄略天皇という構図で補強されている。

ちなみに慶雲2年(705)2月に姓日下部連を賜わった日下部意卑麻呂は河内国河内郡の人である。なお、甲斐の日下部については、正倉院宝物の調庸白綻金青袋の墨書き銘に「甲斐国山梨郡加美里日下マ□□□ 一四 和銅七年(714)十月」とあることから、山梨郡に日下部が置かれていたことが確認される。

○矢作部（やはぎべ）

職業をその姓とした氏族で、都留郡にその本拠を置いていた。都留郡散仕矢作部宮麻呂が「正倉院文書」天平宝字5年(761)12月23日付甲斐国司解に見え、「日本三代実録」貞觀14年(872)3月20日条に都留郡大領矢作部守雄と少領矢作部毎世に矢作部連を賜姓したことが見える。中央伴造は矢作連・矢作造があり、河内国（若江郡）を本拠地とした。また、河内国若江郡には式内社矢作神社が鎮座する。

現在の笛吹市一宮町に上矢作・下矢作という地名がある。貞治3年(1364)の一蓮寺守領目録に「矢作郷」と初見される。古代からの地名かは明らかではないが、この地は国府・国衙・国分寺などの地名に近く、古代の職業部である矢作部が置かれたと推定する研究者もいる。

○弓削部（ゆげべ）

弓の製作、梓弓の製作と進上を職業とする部である。文献には甲斐の弓削部はないが、甲斐（八代郡）・河内・近江に弓削神社が存在する。河内国では若江郡に弓削郷が置かれ、弓削神社がある。弓削部の中央伴造は河内国を本拠地とする弓削連であり、弓削宿弥は河内国若江郡・同国洪川郡加美郷などに本拠地を置く。

○丸部（わに）

「正倉院文書」天平宝字5年(761)石山院奉写大般若経所解に巨麻郡栗原郷の丸部（わに）千麻呂が見える。和珥臣は人和国添上郡の和珥を本拠とする氏族である。

なお、丸部と出自が異なるが、西文（かわちのふみ）氏（河内西）の祖とされる王仁（わに）は伝説上の人物で、「古事記」では和珥吉師（わにきし）と記され、百濟より諭請・千字文をもたらした。「日本書紀」応神15年に渡米した阿直岐（あちき）の推薦で、翌年渡米して皇子の師として諸典籍を講じたという。西文氏は河内国吉市郡を本拠とし、支族に馬・藏・高志（こし）・栗柄などがあり、東漢（あずまのあや）氏とともに文筆を業とした。

○漢人部（あやひとべ）・上村主（かみのすぐり）

東漢氏は漢人部の管理者で、上村主は地方的管理者といわれている。「漢人部」については巨摩郡栗原郷漢人部町代・千代の名前が正倉院文書の天平宝字5年(751)12月24日「甲斐国司解」に見える。漢人部は渡米系氏族ではなく、渡米系技術氏族である東漢氏を養うための日本の農民であり、技術者集団のために牛座活動を行っていた可能性もあるといわれる。

「東漢氏」は大和国高市郡椿前（ひのくま）を本拠とした氏族で、応神天皇20年に渡米した阿知使王（あちのおみ）

を祖とする有力豪族といわれる。漢人は朝鮮半島からの渡来人で、「雄略16年に漢部を集めて伴造を定めた」とあり、欽明元年にも朝鮮の漢人を国郡に安置した」「日本書紀」とあるのは、各地の渡来人を東漢氏に支配下にいた経過を示したものである。5世紀末～6世紀中葉の渡来人は「今來漢人」（いまきのあやひと）と呼ばれた。

また、「類聚国史」卷54の入部に節婦として天長6年(829)10月19日条に甲斐國の上村主万女（かみのすぐりよろづめ）が見える。

なお、上村主の中央に置ける本拠地は河内国大槻郡質美郷で、甲斐國山梨郡加美郷との関わりについて、大隅氏は強い興味を示している（大隅消済 2004『山梨県史』通史編1 第4章第6節「ヤマト政権と甲斐」 山梨県）。

3. 国司等

文献に見える奈良時代の甲斐国守は13人を数えるが、この中には渡来系氏族の出身者が多いといわれている。中でも河内国と関わりが深いのは、田辺史氏と馬史氏、葛井氏である。

○田辺史足広（たなべのふひとひたり）

「天平3年(731)12月、甲斐国守田辺史足広が身体が黒く髪尾は白い神馬を献上したところ、朝廷は大端に当たるとして天下に大赦し、孝子らに賚給し、馬を獲た者に位階を進め、国司ら関係者の恩賞し、更に甲斐国は庸、馬を出した郡は調庸とともに免除するという恩典を下している。」（県史・資料編3より）

田辺史氏の祖先に田辺史伯孫（雄略9年7月）「日本書紀」がいる。伯孫は河内国飛鳥戸郡の人で、「その女が古市郡の書首（ふみのおびと）加庵の妻となって兒を生んだので、蟹の家に賛して夜月に還る途中、蟹田陵の下で、赤駒にのった人にあった。ところがその馬は異体蓬生、殊相逸發であったので、伯孫は己の馬と換えて帰り、明日、その馬を見ると土馬に変わっていた。そこで怪しげに蟹田陵に求めると、己の馬が土馬の間にあったので、再び取り換え帰った」という。」（日本書紀）

この逸話は埴輪馬の起源伝説として有名であるが、一方、伯孫の一族が馬に開心の高いことを示したものとしても有名で、同じ渡米系の書首と親戚関係にあったことも示している。

田辺史氏は河内国安宿（あすかべ）郡資母（しも）郷（現在の大阪府柏原市国分寺田辺一帯）に本貫を置く渡来系氏族で、田辺史氏は後に上毛野公（かみつけのきみ）と改氏姓する。原正人氏は「田辺史氏の一族は古済より渡米して河内国に本拠し、もっぱら馬馴いの技術をもってヤマト政権に奉仕してきた渡米系技術集団の一族と見なされる。田辺史足広が甲斐守に選ばれた最大の理由もここにあったのであり、広足もよくその出自的環境を自覚し、甲斐国行政の事始めにその手腕をアピールしようとはかったのではないかろうか。」（原正人 2004『山梨県史』通史編1 第5章第4節「奈良時代の甲斐国司」 山梨県）と言う。

○馬史比奈麻呂

田辺史氏の10年後に国司に任命された国司で、天平13年12月10日に補仕した。

馬史氏は河内国古市郡に本拠を置いた一族で、王仁の後裔氏族の一つである。その氏名の通り、田辺史氏と同様、馬の飼育にかかわりの深い一族である。王仁は書首の祖とも記され、『新撰姓氏録』には「武生宿禰、文宿禰同祖。王仁孫阿波古首之後也」とある。武生連は天平神護元年(765)の記録により、馬藏(馬史)史の一族であり、文宿禰氏と同族で田辺史氏と関係が深いことが分かる。田辺史氏と馬史氏は甲斐國の馬生産の増加対策を実現するためには派遣された可能性が高いと見られている。

○葛井連道依と恵文

葛井連道依は『続日本紀』宝亀9年(778)3月10日条に「正五位下葛井連道依を少将とす。勅旨少輔・甲斐守故の如し」とみえ、甲斐の因に直接赴任しない遣任国司であった。この葛井連道依は元は白猪史氏といった。これは養老4年5月に葛井連を賜ったもので葛井とも書き、のちに河内国志紀郡長野郡藤井寺の地に本拠した百濟系渡来氏族である。

道依以前にも甲斐と葛井連一族とのかかわりは深く、国守ではないが甲斐國府の官人として赴任していた葛井連恵文がいる。天平勝宝4年(752)年4月以前に甲斐國から貢上された正倉院宝物の太狐兒面袋白絹裏の墨書きにある「□正八位葛井連恵文」である。この銘文は当初性が不明であったが、末木(末木健一 1986「甲斐口麻郡の成立と展開」)『研究紀要3』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財相センター)や平川(平川南 『正倉院御庫・甲斐銘文—甲斐國關係一小考』『山梨県史研究』8)の研究によつて「葛井」である蓋然性が高まつた。平川氏は「恵文」を中心から派遣された国医師と推定している。

葛井氏の中には造東大寺司など寺院や写經関係者が多い。恵文は息子の「広往」を優婆塞(在家の仏教信者)として政府に貢進していることから、やはり仏教関係の職業であった可能性もある。折しも天平13年(741)は聖武天皇による「國分寺創建の詔」の発布された年であり、大平宝字5年(761)に国守として赴任した山口忌沙美麻呂に先んじて、國分寺造営のために派遣されていた可能性も否定できない。

また、蘿崎市中田小学校遺跡から「葛井」と墨書きされた9世紀前半代の上部器皿が出土し、人物の葛井と地名の藤井の関連性も想定されるに至っている。

4. 馬と甲斐

① 馬の伝来

大陸からの馬の伝来については『三国志』魏倭侵入伝に「牛馬なし」とされることから、考古学的には4世紀末~5世紀初頭と考えられている。

山梨県甲府市塙部遺跡、中道町東山北追跡の低埴丘墓の周溝から4世紀後半の馬の歯が発見されている。また、隣

県の長野県でも5世紀中葉の馬骨が多数出土している。これらは全国的にも古い例である。馬具の古い出土例では4世紀末または5世紀初頭の年代が想定されている福岡県若司古墳などがあり、金属製以前には骨や皮製の響等が存在した可能性が指摘されている。

したがって、3世紀代に日本に牛馬が存在したかは不明ではあるものの、4世紀後半には乗用として馬が列島に持ち込まれ、遅速く甲斐國に持ち込まれたことは明らかで、その飼育にあたり渡米人がきたことも当然のことと思われる。

馬の渡来については、『日本書紀』応神天皇15年8月条に百濟王から牡牝各1疋ずつの駿馬が送られ、これが文献上の馬の渡来になる。また、有名な4世紀末から5世紀は朝鮮半島での高句麗との戦が頻発し、高句麗の大王碑文には西暦391年、400年、404年、407年百濟と倭の連合軍が高句麗と戦い半島に攻め込むが、大負けしていることが記されている。この敗因の一つに、倭軍の歩兵と高句麗軍の騎兵の差があつたといわれている。

そこで、大和朝廷は馬の飼育に積極的になるわけで、最初は九州や畿内周辺の大和地域や河内地域に馬飼や小牧を設定し、飼育に力を入れたのであろう。また、「古事記」「日本書紀」での133件の馬の伝承的記述も、仁德天皇の時代から敏達天皇の時代に集中し、特に雄略天皇の頃では、記述の35%を占めるという。

雄略天皇の馬に関する記述の中でも、甲斐の黒駒に関する記述は有名で、大工の棟梁である韋那部真樹が、下着だけをつけた采女の相撲に氣を取られ、振り下ろした斧の刃を欠いたことが、雄略天皇の怒りに触れ、刑場に送られたときに、命を助ける使者を乗せた甲斐の黒駒が疾走して命を取り止めたという逸話で、「ねば玉の 甲斐の黒駒駆せば 命死なまし 甲斐の黒駒」という歌が残る。

恐らく、4世紀から5世紀にかけては畿内周辺で小牧が置かれ、小規模ながらもそこで子馬の出産・飼育を積極的に展開したり、東国の大規模な牧からの貢馬の飼育を行っていたものと思われる。しかし、畿内の生業が活発になると、畿内周辺での大規模な馬の飼育は困難となり、8世紀初頭までには東国に大きな牧が移され、生産の中心が東国に移されるようになったのではないかうか。

なお、畿内の馬駒についての記録は「紀記」に多い。まず、河内馬駒については次のような記述がある。

i 「日本書紀」履中天皇5年9月壬寅の条に天皇が淡路島に狩をした日に、河内馬駒(かわうちうまかいべ)らが駕に從って、轡につける手綱を執った。

ii 「同」繼体天皇元年正月の条 河内馬駒首荒籠

iii 「同」同23年4月紀 近江の毛野田の従者として 河内馬駒首御狩

iv 「同」同24年9月紀 河内母駒馬駒首御狩(謂良都枚岡郡が本貫といわれる)

v 「同」欽明天皇22年紀 河内馬駒首押勝

vi 「同」天武12年(683)9月紀 川内馬駒

■「同」同年10月紀 姿羅馬創造、菟野馬創造が速の姓を賜る。河内國讚良郡に本貫を置く。

この他に倭馬頭部があり、その他山城國の八坂馬創造(天平5年)、讃岐国寒川郡に馬銅が置かれていた(和銅5年)こと、播磨國賀古郡に馬銅造(大平神護元年)、筑紫國の馬銅臣(雄略天皇23年)などの記述があるが、河内と大和が初期の馬銅の中心地であったことは間違いない。「延喜式」馬銅戸の条には国別戸数が示されており、次のような数となる。

左右馬銅戸の分布(直木孝次郎氏作成)

	右京	山城	大和	河内	攝津	美濃	尾張	合計
左馬銅	0	6	40	108	0	3	9	166
右馬銅	3	5	49	51	16	3	0	127
計	3	11	89	159	16	6	9	193

② 聖徳太子と黒駒伝説

『扶桑略記』「水鏡」「聖徳太子伝啓」などに「聖徳太子が諸国から貢上させた善馬のうち、甲斐の黒駒を神馬として認め、試乗により富士山の上まで飛行した」という聖徳太子の「甲斐の黒駒」伝説は、甲斐国と太子との少なからぬ関係から出た可能性がある。というのは、甲斐国と壬生直の関係からである。甲斐には壬生部が置かれていたことが「日本三代実錄」元慶6年(882)11月条に記され、そこには「甲斐國巨麻郡の人、壬生直益成とその子女7人の本籍を山城國愛宕郡に移す」とある。

「壬生部」は「乳部」とも書き、皇子の養育のために置かれたもので、「日本書紀」推古天皇15年2月に「壬生部を定む」とあり、6世紀以降に設置されたものと考えられている。なお壬生部が単位維承予定者としての厩戸皇子(聖徳太子)のために設置されたとする見解がある。「日本書紀」では厩戸皇子の長男の山背大兄王が上宮乳部を領有していたことから、7世紀前半の壬生は上宮王家と密接な関係があったといえる。

また、壬生直益成が甲斐國巨麻郡の人であったことも、「聖徳太子と甲斐黒駒」の伝承の背景となる馬の飼育と関係して見るところ興味深い。恐らく6世紀には設置された壬生直が、巨麻地域において牧経営を開始し、軍事用として馬の飼育を行って、その中の駒馬を厩戸皇子(聖徳太子)に献上したのが伝承となったのではないかろうか。ちなみに、聖徳太子墓は大阪府南河内郡太子町太子の磯長谷古墳群中に所在し、太子の墓として蓋然性が高いという評価がある。

なお、明治大学教授吉村武彦氏は平成16年11月6日に山梨県立文学館の講堂での講演会で、田辺史広足が獻上した馬を大塙として評価し、大赦の事務的な中心人物「治部卿從四位上門部王」が、聖徳太子ゆかりの人物であれば、「甲斐の黒駒」の故事にかこつて、高い評価と恩賞も首肯できるのではないかという、想定を述べている。

③ 軍馬としての利用

大化の改新の後、675年の壬申の乱での大海人皇子の軍にいた「甲斐の勇者」が騎馬兵であったことは、その記述から推定することが出来るが、甲斐の勇者は騎馬兵という

だけでなく馬の飼育に長けた集団の一員であったと思われる。また、6世紀～7世紀の甲府盆地を取り巻く古墳群からは馬具が多数出土することからも、甲斐の馬生産の高さを推定することが出来よう。なお、馬具の出土は駿河、信濃はじめ東国などで出土量が多い。

④ 牧の出現

大化改新以後、天智天皇の7年に近江国に牧を開いた記事があり、西暦700年、文武天皇4年3月17日条に「諸国をして牧地を定めて牛馬を放たしむ」という記事があるが、これが令制の牧の初見と言われている。なおこの7年後、慶雲4年(707)3月には23ヶ国に「官」の字の焼印を配ったことが記されている。

令制の牧が甲斐国にあったかどうかは不明であるが、柏前牧と真衣野牧が令制の牧であった可能性はあると推定されている。というのは、穗坂牧が「栗」の焼き印を持つことが延喜式に残され、前二者の牧は記録が失われているからである。これは前者の両牧が「官」の焼き印を使用していることが了解事項のため、記載が漏れた可能性があるという。

川尻秋生氏はこの両牧を「弘仁式」(820年成立)にすでに記載されていたと考えて(川尻秋生 1999「御牧制の成立」『山梨県史研究』7号)、両牧が令制の牧であった可能性を指摘している。令制の牧は「官」の焼き印を使用していたが、甲斐の穗坂牧や信濃の望月牧が「官」以外の焼き印を使用しているのは、9世紀後半から10世紀はじめに新しく設置された勅旨牧であったことが原因であったと推定している。

では、甲斐の牧はどのような場所に存在したのだろうか。延喜式の御牧は柏前牧、真衣野牧、穗坂牧があり、穗坂牧は現在の並崎市穗坂町、真衣野牧は武川村牧の原に比定されているが、柏前牧は高根町櫻山、小淵沢町～長野県富士見町の柏平・柏尾、勝沼町柏尾など諸説がある。

しかし、甲斐国内に御牧以前の馬の飼育場所が存在したこととは、次に述べるような記録に明らかであり、長屋王邸出土木簡の「甲斐園馬司」の墨書きや、「正倉院文書」駿河國正税帳に記載された御馬部領使の山梨郡散事小長谷部麻佐と從者の記事から、八世紀前半には馬にかかる職の存在と、飼育をした牧の存在を想定できる。

小長谷部については、「駿河國正税帳」天平10年(738)に御馬部領使の山梨郡散事小長谷部麻佐と小長谷部練麻呂が見えるが、御馬部領使は馬の扱いになれた人物と考えてもよいだろう(原正人 1995.3「奈良時代の甲斐園馬司」「山梨県史研究」3)。この記事以前には、長屋王邸出土木簡に甲斐園馬司が出仕し食糀を受けている記述があり、この木簡年代が和銅4年(711)～靈龜2年(716)の間に収まることから、奈良時代初めには既に甲斐園から都に馬司が出仕していたことが明らかとなった。なお、「続日本紀」神護景雲2年(768)には八代郡の人で小谷直(おはせのあたい)五百依の名が見えてるので、小長谷部の管理者は山梨郡に居住していた可能性がある。

奈良時代の甲斐の牧が何処に置かれていたのかは、名称も場所も明らかではないが、①6世紀の馬具出土古墳群と関係が強いこと、②壬申の乱に活躍した「甲斐の勇者」が、国司や都司層と関係があること、③軍團とのかかわりから国府に近い場所を想定することができること、④御馬部領使の存在などを考えると、山梨郡・八代郡下に存在した可能性を否定することはできない。

これらの牧は、律令の初期には山梨・八代両郡下に設置したもの、和名抄の郡・郷の制定時代には既に山野の開拓によって、牧から耕地へと転換を余儀なくされ、牧は本格的に巨麻郡へ移されたものであろう。

まとめ

甲斐と河内と馬の関係について述べてきたが、その多くは既に知られていることであり、耳目に新しいものではない。しかし、河内と甲斐の関係は今まで見てきたように深い関係があり、文献に見える以上の関係が隠れていると思う。

河内国は5世紀の倭王權の象徴として仁德天皇陵と言われる大山古墳や履中天皇陵とされるミンザイ古墳などがある百舌鳥古墳群や、応神天皇陵といわれる葦田御廟山古墳、仲哀天皇陵と言われる岡ミサンザイ古墳等がある古市古墳群などの大規模な前方後円墳や円墳・方墳等の陪塚があり、しかも河内国は馬飼部の中心地であることは既に述べた。これらの古墳群や周辺の南河内郡美原町の黒巣山古墳、藤井寺市野中古墳、堺市大塚山古墳などからは大量の冑や短甲や挂甲、武器が出土しているので、のことからも馬と倭王權は密接な関係にあったことは言うまでもない。

さかのぼって、4世紀中葉には鉄製短甲としては最古級のものが山梨県中道町大丸山古墳から出土し、古墳の東側200mほどの台地上に4世紀後半に造られた東山北邊跡2号低墳丘墓の溝から馬の骨などが出土したことは、倭王權との早い結びつきを照明するのに十分な資料であろう。

なお、5世紀の山梨県三殊町大塚古墳や豊富村王塚古墳からは短甲や挂甲が出土しているが、挂甲は騎乗で着用する甲冑であり、5世紀後半の山梨県中道町下曾根のかんかん塚古墳（茶塚）からも、挂甲と蒙古鉢型の冑や山梨最古の馬具が出土しており、これ以外の甲冑出土例からも、倭王權の軍事的な影響下に甲斐國が置かれていたことが明らかである。このように、古墳時代の中斐と河内両国つながりは、既に述べたように律令国家の中へも脈々とつながり、古代社会で強化されていったのではないかと思う。

甲斐国山梨郡・八代郡・都留郡における古代牧についての一観点

今 福 利 恵

はじめに

1. 古代における馬の出現
2. 古代牧の成立
3. 山梨郡・八代郡下の様相
 - (1) 柏前牧と勝沼
 - (2) 牧庄と牧山村
 - (3) 黒駒牧
 - (4) 石和周辺

4. 都留郡下の様相

まとめ

はじめに

古代甲斐国において穂坂、柏前、真衣の三御牧が巨麻郡下に設置された。これら以外にも小笠原牧や逸見牧、武河牧、八田牧、飯野牧等いくつかの私牧の存在が知られている。こうした私牧について実態はあまり明らかではなく、その推定位置にも諸説がある。これに一つの視点として、南アルプス市百々遺跡の発掘調査成果を手がかりに、近世史料から俯瞰しながら古代牧の位置を推定する作業を行ったところである（今福利2004）。

中部横断自動車道の建設に伴って南アルプス市百々遺跡において9世紀から15世紀の集落跡が調査された（山梨県教育委員会2001,2004）。この百々遺跡で注目されたものとして多数の牛馬骨の出土がみられた。これらは御勒使川扇状地上において中世の八田牧に関連するものと考えられ、古代にも遡るこの地域に多数の牛馬が存在していたことが明らかとなった。

近世19世紀初頭に編まれた『甲斐国志』村里部からの牛馬分布をみると地域的な粗密が極端に現れる。百々遺跡のある御勒使川扇状地域においては扇頂部城あたりに近世には相対的に多数の牛馬が存在していることがわかる。百々遺跡で発見された牛馬数は延べ88個体で、ほぼ牛と馬の比率は半々であった。近世史料にみる牛馬数においても御勒使川扇状地域では牛と馬がほぼ半々の比率で存在している。これは中世に存在した八田牧が、形態を変えていったとしても、近世に至るまでその飼育等の伝統を遺している可能性があるものと思われる。これを検証するにあたり、古代牧の所在地としてほぼその場所が特定できる穂坂牧、小笠原牧についてみると、やはり近世においても周辺と比

較して多くの馬が存在している。こうしたことから古代に牧が設置された地域は近世に至ってもその伝統を強く残している可能性が高い。

近世において牛馬数が相対的に多い地域は、古代の牧の推定地にほぼ対応するものととらえることができる。牛馬数の相対的に多い八ヶ岳南麓は逸見牧、駒ヶ岳北東麓は真衣牧、八ヶ岳西麓は柏前牧に対応し、さらに武川牧、甘利牧などが想定できると考えた。こうして南巨麻郡下の飯野牧、岩間牧についても検討を行ったところ、古代史料にみる状況（秋山2003）とほぼ一致していた。

こうした検討の中で、柏前牧が通説とやや異なる結果となつた。柏前牧は通説では巨麻郡の高根町櫛山という地名からら念場原が想定され、異説に山梨郡勝沼町柏尾が想定され、また巨麻郡八ヶ岳西麓の小淵沢町から長野県富士見町域とする説もある。近世牛馬分布からみると八ヶ岳西麓の馬数が圧倒的に多く、高根町念場原よりは小淵沢町・富士見町域に想定が可能である。また勝沼町柏尾については管見したところ近世にさほど多くなく、近世史料からは想定するだけの根拠は地名以外に見いだせていない。

こうして、発掘調査の成果を検討する中で、近世史料の『甲斐国志』により巨麻郡下の牛馬数をみれば古代・中世牧の様相を色濃く反映している可能性を見い出すことができた。さらに同様の方法にて山梨郡、八代郡、都留郡下の古代牧について検討してみたい。

1. 古代における馬の出現

山梨県下で馬の存在が確認できるのは4世紀末頃で、甲府盆地縁辺部になる。甲府市塙部遺跡や中道町東山北遺跡の方形周溝墓の内から馬の歯がみつかっており、ほぼ4世紀末から5世紀初頭の年代が位置付けられている（村石1998）。さらに甲府市桜井畠遺跡の方形周溝墓からも同時期の馬歯が出土したとされる（木本2004）。いずれも全国的にみても最古級に属し、かなり古くから馬生産に関わっていたものと思われる。古墳の副葬品に馬具がみられるのは、5世紀後半からとなる。中道町かんかん塙古墳の副葬品には馬具として轡、木芯鉄板張輪轆、三環轆がある。この古墳は東山古墳群の一つで、あたりには4世紀後半の東日本最大級となる全長169mの前方後円墳の銚子塙古墳や丸山古墳等、大形前期古墳が集中するところであり、先の東山北遺跡も同じ古墳群内に位置する。4世紀には畿内王權とも密接に結びついていた地域でもある。さらに5世紀後半のものとしては、東山古墳群から西方の豊富村王塙古墳より鏡金されたF字形鏡板付轡が、また5世紀末から6世紀初頭に位置付けられる三殊町大塙古墳から椿円形鏡板付轡と剣菱形杏葉、辻金具といった馬具類が出土している。5世紀代の馬具は少ないと、甲府盆地南部の曾根丘陵地帯に立地する立派的な古墳から出土する傾向にある。

6世紀以降は、この曾根丘陵地帯からさらに東側の甲府盆地南東部へと馬具の出土する古墳は広がりを見せるようになる。中道町東山古墳群は5世紀後半以降大形古墳はつくられなくなり、勢力的には衰えていくが、考古博物館構内古墳では挂甲や轡、鉢貝、環状辻金具、半球形辻金具、飾り金具等が、また稻荷塙古墳では、象眼大刀、銅鏡や、轡、鏡、飾り金具、雲珠といった馬具類の出土がみられる。この辺の中道町金沢古墳群では6世紀後半の素環鏡板付轡が、米倉山古墳群孤塙古墳でも轡が出土している。5世紀の王塙古墳がある豊富村域では浅利諒訪神社の素環鏡板付轡や三星院古墳群から素環鏡板付轡が知られる。三殊町域でも大塙古墳のある北原古墳群から素環鏡板付轡が、また一条氏船跡の古墳から7世紀前半の素環鏡板付轡が、これら曾根丘陵地帯では東山古墳群での馬具が突出している。馬骨は現在のところ出土していないが、古墳には広く多くの馬具が知られ、馬が存在していたことをうかがわせている。

甲府盆地東部は、丘陵地帯でなく扇状地形がひろがるところで、ここに多くの後期古墳群がつくられ、馬具の出土も多いところである。八代町米倉・永井・岡・南地区的八代古墳群では、古柳塙古墳から7世紀後半の金銅製透影心葉形鏡板付轡、金銅製壺蓋が、莊塙古墳では金銅製馬鈴が知られている。また堀塙古墳では馬二頭が並んで埋葬され、うち一頭の馬には轡が装着されていたという。

八代町、御坂町竹居にまたがる竹居古墳群では、御崎古墳から長方形透鏡板付轡、杏葉、辻金具、飾り金具、蛇尾金具、鞍金具などの金銅製毛彫馬具一式が出土し、古墳時

代終末期のもので熊我氏と関連するものとされている。

御坂町錦生古墳群は大形横穴式石室を持つ姥塙古墳を盟主墳とする。この古墳群の背景にあるとされる集落遺跡の二宮遺跡からは、住居跡から銚具付立開素環鏡板付轡が出土している。金川左岸の長田古墳群では1号墳で板状立開素環鏡板付轡が出土しているのみである。

一宮町千寺寺・石古墳群は、石倉村出土の銚具付立開素環鏡板付轡があり、この他、因分古墳群塙地3号墳の馬具、4号墳の馬籠り金具が知られている。しかし、金川左岸の四ツ塙古墳群は26基を調査したが、馬具は出土していない。

勝沼町では、祝古墳群の冠塙古墳から7世紀代の鉄製壺蓋が出土している。

甲府盆地南東部では、比較的広域にわたり馬具がみられる。ただ、八代町・御坂町域あたりでは金銅製品が目立ち、中心的な位置を占めていた様相がうかがえる。その周辺地域での出土はあまりめだったものではない。

一方、甲府盆地北部は後期にいたって古墳が築造される地域である。

盆地北東部にあたる春日居町・山梨市では牧洞寺古墳を盟主墳とする岩下古墳群や、上神内川の稻荷塙古墳があり、馬具は上栗原の沖田無名塙で板状立開素環鏡板付轡が二つ出土している。

春日居町鍋目地区にある春日居古墳群は馬具類が抜きんでいる。寺の前古墳では7世紀前半の金銅製心葉形鏡板付轡、板状・銚具付立開素環鏡板付轡が、また平林二号墳で金銅製花形鏡板付轡、板状立開素環鏡板付轡が出土している。御坂・八代地域と同様に金銅製品が目立っている。孤塙古墳では二つの素環鏡板付轡と鞍金具が、梅沢支群無名塙では素環鏡板付轡と鉄製壺蓋が、天神のこし古墳で素環鏡板付轡が知られている。この地域では7世紀後半に寺本寺が建立されるなど6世紀から7世紀にかけて急成長した集団ととらえられている。

甲府盆地北部にあたる石和町・大藏経寺山古墳群では七ツ石支群無名塙から鉄製楕円形鏡板付轡、扇形兵庫鎖立開素環鏡板付轡がある。

甲府市、横根・桜井横石塙古墳群は143基の存在が知られ、渡来人との関係が取りざなされている。横根支群39号塙から馬齒が出土しているが、これ以外に馬具類の出土はなく、馬飼育との積極的な関連は薄いものと考えられる。

さらに盆地北西部あたりでは、大形石室を持つ加牟那塙古墳のある千塙・山宮古墳群や赤坂台古墳群が存在している。馬具の出土が知られるのは赤坂台古墳群で、轡や飾り金具他に毛彫金銅製馬具が出土している。

県東部の都留郡内方面の古墳については、わずかながら桂川流域に点在し、石室の形態から相模とのつながりが強いとされる。大月市では、七保地区無名塙、強潮子の神古墳、宮谷地区金山古墳、上鳥沢地区の鳥沢古墳が、また上野原町では塙場地区的塙場古墳群、鶴川地区の鶴川上ノ山古墳群、大野地区西ノ原古墳が知られている。いずれも馬具類の出土はみらず、集落遺跡も希薄である。

2. 古代牧の成立

古墳時代において甲斐国にも馬の生産は、古墳副葬品の馬具からみて甲府盆地東南部と甲府盆地北部であったと推定できる。「日本書紀」雄略天皇十三年「甲斐の黒駒」にみる駿馬としての伝承や、壬申の乱（672）「甲斐の勇者」「馳せ討て」という騎兵の存在が明らかにされている。また、「日本書紀」天平三年（731）甲斐国が献上した黒身白髦尾の神馬や「日本記略」天長六年（829）「御武徳殿。覽甲斐国御馬」など古くより名馬の産地として知られてきている。

文武天皇四年（700）に牧の制定が諸国に命令され（山口1994）、甲斐国でも、「長屋王木簡」から天平一年（729）以前に「信濃・上野・甲斐御馬司」とあることや「駿河国正税調」天平十年（738）より山梨郡散事小長谷郡麻佐が御馬部領使としてみえることから、馬の献上があったことがわかる。すでに甲斐国の馬生産が8世紀初頭までは確立していたと考えられている。政府が軍馬確保のため御牧を設置し、甲斐国においては「延喜式」に「凡年貢馬者。甲斐國六十疋。真衣野・柏前両牧三十疋。穂坂牧三十疋」と規定されている。

これら3牧はいずれも巨麻郡下に置かれたとされ、それ以前に馬生産が推定される甲府盆地周辺は馬生産から離れてしまっているかのようである。しかし、御牧のうち柏前牧は一説に勝沼町域に想定され、御坂町域の黒駒牧や牧丘・塙山方面の牧庄あるいは石不牧などの存在も推定できる。また馬遺体自体の遺跡からの出土をみると（木本2004）と古墳時代では甲府盆地にみられるが、奈良・平安時代以降では巨麻郡下の他に、盆地東部にもその出上が知られている。こうして甲府盆地における旧来の馬生産を継承する部分も断片的はあるが、うかがい知ることができる。以下でこのあたりを検証してみたい。

3. 山梨郡・八代郡下の様相（第1図、第2図、表1、表2）

（1）柏前牧と勝沼

柏前牧は甲斐三御牧の内、所在が明確でないが、八ヶ岳南麓の高根町櫻山から念場原とするのが一般的である。一方「甲斐国志」などの説で、「柏前ノ地後伊群ナラズ、山梨郡柏尾ニ尾崎林ナド云地名存シ、岩崎山ニ相並ビ黒駒山ヘモ続キ、牧馬ノ事ニ相伝ヘタル言モ多ケレバ、是ゾ柏前牧ナラン乎ト云旧脱ハアレドモ、此處（高根町櫻山）亦炳然タル古述ナリ」とあるように勝沼町柏尾を候補としている。いずれも地名と周辺地形によっているが、根拠は明確でない。

『甲斐国志』による近世史料によって牛馬分布を、各村あたりの保有頭数とこれを世帯数で除した保有率でみていこうことにする。勝沼町域では、巨麻郡下でみたような突出した数はみられず、牧を想定するには至らない状況である。勝沼宿、下栗原宿に比較的多くみられるのは、甲州街道沿いでであることによるものであろう。一集落あたりの保有率

をみても平均して10%以下で、生産をしていた形跡はみられない。等々力、縄塚、小佐手、休息、中村、上栗原、歌田、一丁田中といった日川と重川にはさまれた勝沼町域あたりでは、先の勝沼宿、下栗原宿を除くと、各村で平均3.3頭、保有率も3.8%ときわめて低いことがわかる。また日川左岸となる岩崎、野呂、矢作、中尾、千米寺、藤井、一宮、地蔵堂、石といった御手洗川にはさまれた勝沼町南部から一宮町域は、古墳時代に古墳群が形成され、馬具類もみられる地域であるが、平均3.7頭、保有率も4.9%となる。日川北岸部の勝沼あたりよりやや高いものの、大差ない状況である。勝沼町柏尾あたりは柏前牧の存在を反映した状況にはないことがわかる。

なお、柏前牧の位置について、小瀬沢町から長野県富士見町に想定する考えがあり、富士見町葛久保に「柏平」の地名、小六の「柏尾社」、平安時代甲斐型上器の分布があることを根拠としている（木本健1987）。私も近世史料からの牛馬分布からみたとき、当該地域には非常に多くの馬が存在していることなどから、この説を支持するものである（今福2004）。

（2）牧庄と牧山村

放光寺梵鐘銘貞和五年改鑄（1349）「甲斐国牧庄法光寺奉鉢施鐘一口 建久二年（1191）八月廿七日」や柏尾経塚銅製經筒、康和五年（1103）「東海道中斐国山東郡内牧山米沢寺」とあるように牧莊、牧山村という地名が知られ、牧丘町から塙山市北部が比定されている。その莊名から牧の存在が考えられるが、なんら牧に関わる史料は知られていない。また、この地域には、古墳の分布もみられず、古くから馬生産に関わった形跡は考古学的にもみられないところである。

『甲斐国志』の牛馬分布をみると牧丘町域において多い傾向がみられる。牧丘町飯川流域の倉科80頭、さらに西保下、西保中、牧平、西保北に集中しており、この五村で、平均42頭、保有率も23%と4軒に1頭の割合で存在することになる。これらは周辺村と比較しても非常に多い数値となる。また笛吹川沿いにもやや多くみられるのは、三富村、牧丘町域から山梨市岩手、八幡、塙山市三日市場を中心下井尻あたりまでとなる。平均11頭、保有率13%となるが、秩父往還によるものとも考えられる。

平安末期には牧庄と呼ばれていることから、この頃には牧が存在していた可能性は近世資料からみても高いといえる。

（3）黒駒牧

御坂町黒駒は、甲斐の黒駒の產地に由来するとされる。『八雲御抄』の「牧はくろこま甲斐」や『後撰集正義』巻七の「黒駒の御牧」に詠まれるよう黒駒牧の存在をうかがわせている。ただし、黒駒は名馬のことであって甲斐黒駒と詠まれることが多く、さらに三御牧成立以降の文学史料上にのみでてくるため黒駒牧の存在は疑問ともされる。牧

の存在は、周辺の地名に駒岳、駒ヶ井、駒篠という地名があり、福光園寺はもと、駒岳山大野寺と号したことによっている。福光園寺蔵の木造古祥天女坐像の墨書き銘に寛喜二年（1231）とあり、また木造香王般若立像は平安藤原期のものとされ、古い創作を伝えている。

『甲斐国志』の牛馬分布をみると、上黒駒に多くの馬がみられるが、周囲の大野寺、尾山あたりにはかなり少なく、牧の存在をうかがわせるものはみられない。ただし、古墳時代には群集墳が多く、馬貝類も突出している地域である。上黒駒に多いのは鎌倉往還沿いにあるためと思われ、峠道を下りたる若彦路の奈良原や鷺宿峰の大窪、中道往還の右左口等、保有率で20%前後と、周辺集落より多い傾向が共通している。八代・御坂町域は古墳時代に馬具が卓越する地域でもあるが、古墳分布とは明確に一致していない。御坂・八代町域で近世の馬数は各村で平均6頭、保有率は7%と、牧を想定するにはかなり低い数値である。古墳時代の様相はすでに失われていると見なすことができ、黒駒牧の存在については近世資料からでは見つけることが困難である。

（4）石和周辺

御坂・八代方面は村平均6頭、保有率7%と概して低い数値であるが、中でも比較的多いのが金川下流域の成田、石和町下平井、中川で、この三村で各村平均12頭、保有率12.5%と周辺地域の約2倍となっている。ここは金川より南であるが、中世末には中州九筋二領のうち大石和筋に地区区分されるところである。これより南側の御坂・八代町域は小石和筋に属する。もともと大石和筋と小石和筋は金川によって区分されていたとされ、後世の流路変遷により金川左岸に成田、下平井、中川などが取り残されているものと思われる。大石和筋は古代末に石和御厨が置かれており、また「吾妻鏡」治承四年（1180）「御騎馬石禾栗毛」とあるように牛牧と毛色で馬名を表記する当時の呼称から石禾牧の存在がうかがい知れるところである。石和御厨は石和から鷹島中島あたりを中心に想定され、明治40年以前の笛吹川（現平等川）左岸城となる。石和御厨と牧の関係は全くもって不明であるが、石和御厨もしくはその周辺で馬生産が行われていたとも理解しうる。近世において石和宿に隣接した下平井、中川、成田あたりはその馬生産の形跡を僅かにも残している可能性がある。

一方、笛吹川（現平等川）右岸の春日居町域は古墳時代に馬貝類の出土が目立つ地域で多くの古墳が残されているところである。7世紀には寺本庵寺が建立され、「壬申の乱」の騎兵である「甲斐の勇者」に関わる本拠とする考えもあり（末木1990）、馬生産が行われていた形跡がうかがえる。古代においては甲斐国府もしくは山梨郡衙が設置されたと推定され、甲斐国を中心とした一つである。『甲斐国志』の馬分布では、春日居町国府、加茂に馬が比較的多く、それぞれ14頭となる。国府では92戸で保有率15%、加茂では19戸のため保有率73%と高くなる。この周辺域では

笛吹川右岸山梨市域の上岩下、落合、正徳寺、山根、春日居町領目、徳条、熊野堂、寺本、小松、別田、桑戸、下岩下、石和町松本、山崎で、各村平均3.6頭、保有率6.3%と各村大差なく、国府、加茂に比べ半分以下となる。熊野堂、徳条で保有率がやや高いが、戸数が30戸未満で、馬数も5頭以下とともに規模が小さいため数値がやや多く出たにすぎない。いずれにしろ近世史料で見る限りとりわけ多い頭数、高い保有率であったわけではなく、古代に馬生産があったと推定するに適れるような状況はない。古墳時代に馬生産が行われたとしても、奈良・平安時代に巨摩郡下に牧が整備される中で移転等により廃止され、近世に至ってはその形跡をほとんど残していないものと思われる。

4. 都留郡下の様相（第3図、第4図、表3）

古墳時代から奈良・平安時代にかけて馬生産、飼育の状況が見られない地域であるが、近世においては多数の馬が存在している。この状況は甲府盆地域や巨摩郡下とは明らかに異なる状況が見て取れる。また、山梨郡・八代郡と同じく牛はわずか川波、小菅、都留市中津森にいるのみで、他はすべて馬である。全戸13747に対し馬3977頭、牛12頭、平均保有率32.4%と一村のほぼ3軒に1軒は馬1頭を保有していることになる。甲州街道沿いと大月から富士吉田につながる富士道に多いが、この桂川支流域にも多い。特に多いのが、忍野村忍草、内野、中山湖村中山、長池で、平均保有率87%となり、長池を除く三村で平均68頭となる。ただし近世段階での馬使役の問題は明らかでない。また道志村も高く、全村で280頭、保有率81.9%となる。北側の旧秋山村は道志村より戸数が多いが、馬93頭、保有率は23.8%と遙かに低く、また郡内城でも比較的低い方となる。国中方面からの銀倉街道沿いにおいてもさほど多くなく、荷役に重要視された状況はあまりない。これは中道往還においても同様で、国中方面で中道町右左口に多いが、芦川沿いの梯、占闐、さらに富士北西麓の精進、本栖でも頭数、保有率ともに低い。いずれにしろ郡内地域では近世段階において単に馬を飼育していたのみならず、生産にも多く携わっていたものと考えられ、その飼育生産形態や用途等明らかでないが、古代の牧にさかのぼって考えるには資料もなく、そこに至っていない。

まとめ

甲府盆地東部の山梨・八代郡下の様相は、近世史料から俯瞰すると、牧丘町方面の牧庄、牧山村とされるあたりに古代牧の存在が想定できるものとなった。この地域はそれ以前の古墳時代からの馬生産の系譜がみられないところでもあり、奈良・平安時代に新設されたとも考えられる。柏前牧について勝沼町柏尾に想定できる状況は見られず、その周辺地域も同様である。黒駒牧は、想定される地域が古墳時代に多くの馬貝類がみられるところであり、馬生産が行われていたと考えられるが、その形跡は近世史料上には現れてこない。こうした状況は春日居町領目あたりでも同

様であるが、こちらはわずかに痕跡がみられる。古墳時代に甲府盆地周辺で馬生産が行われていた状況はあるが、律令制の整備とともに御牧が設置され、馬生産の場は巨摩郡下に、一部は牧丘町付近に、移されたと考えておきたい。そして近世史料にみる牛馬分布の濃淡が反映しているのは遅って平安時代頃までであろうことがわかる。

都留郡下における近世の牛馬分布は伊摩郡下と同様にひじょうに数多いものがあるが、古代牧との関係は不明で、また近世に多い理由も私の検討の及ばないところである。

甲斐国の場合について近世史料をもとに検討するというややもすると推測な方法であるが、巨摩郡下における様相は両者を結びつける可能性が高いものとなる結果となつたことから、今回も同様に山梨郡、八代郡、都留郡について解説を試みた。時代の異なる史料を用いているという危険は承知しているつもりであるが、多くの諸先史の御批判、御指摘を賜りたく、あわせて『甲斐国志』のデータだけでもご活用いただければ幸いである。なお、牧は大きく、これから発展に期待し、楽しみでもある。

本稿を草するにあたり、末木健、坂本美大、村石真澄、平野修、杉本悠樹の各氏には様々なご教示を賜った。記して謝意を表したい。

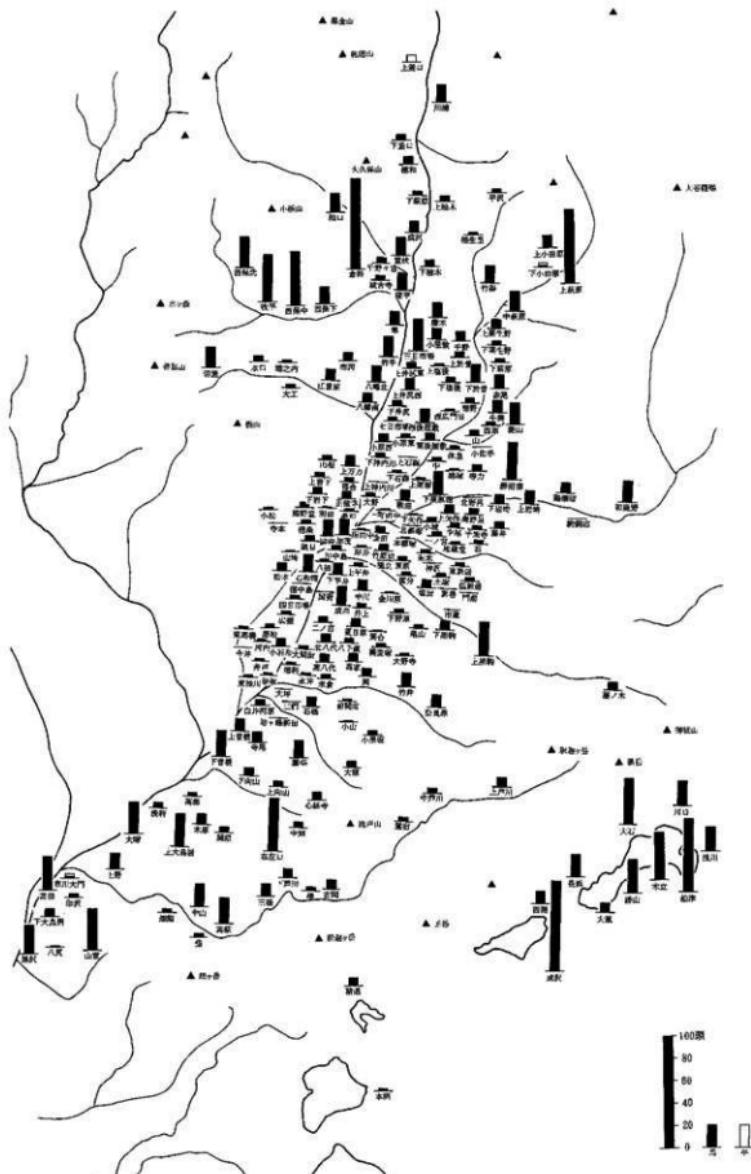
『甲斐国志』村里部のデータについてはデジタルデータとして作成しており、現在、考古博物館の学習支援パソコンにおいて公開中であるので問い合わせていただきたい。

参考文献

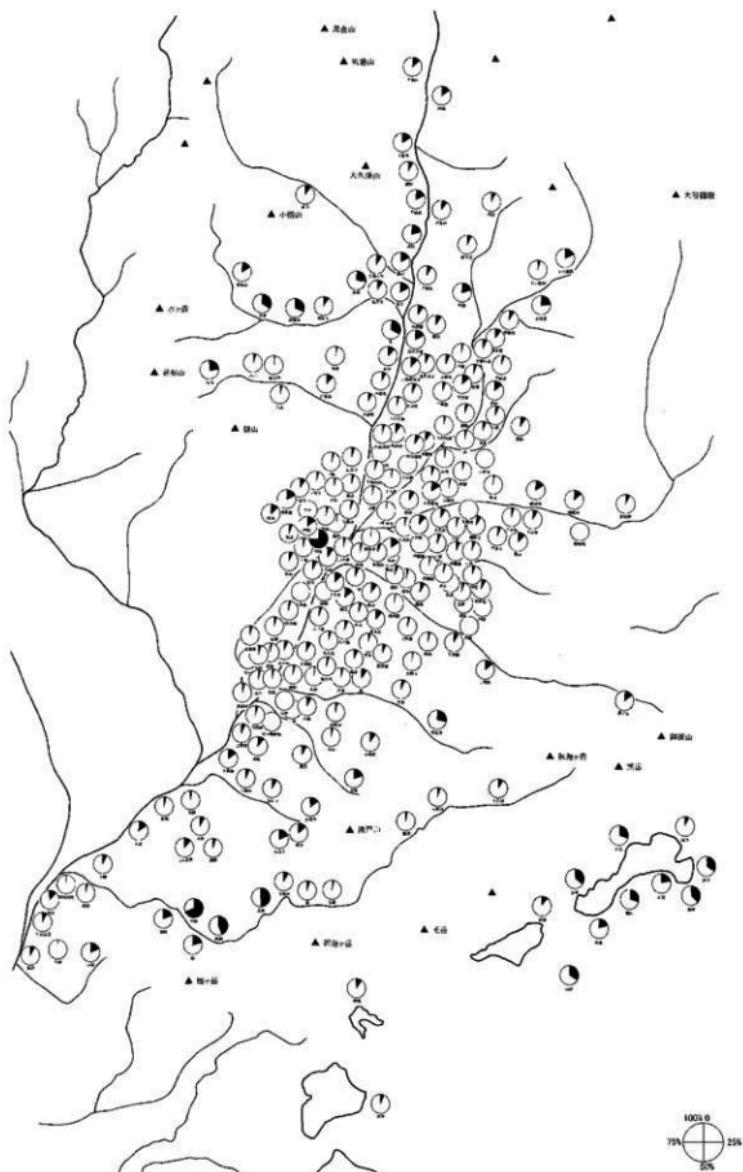
- 秋山敏 1990 「柏前牧」「高根町誌」上
秋山敏 2003 「甲斐の水脈」甲斐新書刊行会
朝野喜高 1990 「甲斐國の庄園公領と地頭御家人」[國立歴史民俗博物館研究報告書] 25
一志茂樹 1950 「官牧」『貴瀬』24-5
磯貝正義 2002 「甲斐源氏と武田信玄」岩出書院
猪股義彦 2003 「奈良・平安時代の御牧路」『山梨考古』90 山梨県考古学会
今福利寛 2004 「甲斐国と麻郡における古代牧についての一提点」「研究紀要」20 山梨県立考古博物館
上野晴朗 1971 「黒崎の牧」「御坂町誌」本誌編集部
坂本美夫 1984 「甲斐の攝(計)御牧」「研究紀要」I 山梨県立考古博物・山梨県埋蔵文化財センター
坂本美夫 1999 「馬具」[山梨県史]資料編2原始・古代2考古(通譜・遺物)
坂本美夫 2004 「古墳の構造」「山梨県史」通史編1原始・古代
坂本正治 1982 「牛馬の分布と職業」「山梨郷土史研究入門」山梨日々新聞社
末木健 1986 「甲斐国と麻郡の成立と張開」「研究紀要」3 山梨県立考古博物・山梨県埋蔵文化財センター
末木健 1987 「ハッカ岳山麓に於ける古代甲斐国境」「甲斐路」59 山梨郷土研究会
末木健 1990 「甲斐佛教文化の成立」「研究紀要」5 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
末木健 1999 「馬と牧」「山梨県史 資料編2」
末木健 2000 「山梨の牧場遺跡」「古代の牧と考古学」山梨県考古学協会
末木健 2003 「甲斐国と御坂路」「山梨考古」90 山梨考古学協会
末木健 2004 「研究レポート」馬遺体の出土状況から」「山梨県考古学論集」V 山梨県考古学論集
杉本悠樹 2004 「古代御坂路を考える」「古代甲斐国官衙研究会第10回例会資料」
杉本悠樹 2004 「桂川中・上流域の奈良・平安時代の様相」「フォーラム古都留郡を考える」見云資料
杉本悠樹 2004 「都留市城址出土の墨書き土器」「山梨県考古学論集」V 山梨

島崎考古学論集

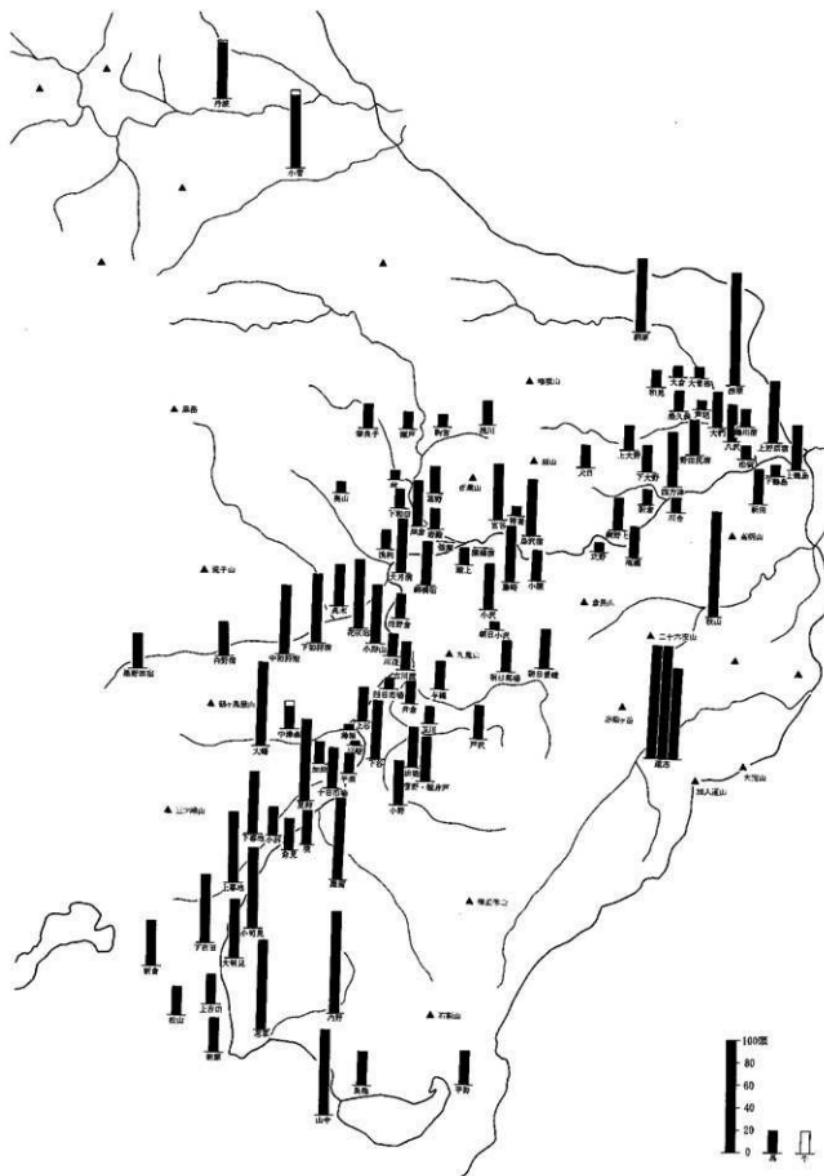
- 田口明子 1998 「山梨県の通過出土動物遺体について」「帝京大学山梨文化研究所報」34
田口明子 2002 「古々道跡1出土のウマについて」「古々道跡1」山梨県教育委員会
奈良泰史 2004 「古代都留郡研究の現状」「フォーラム古代都留郡を考える」発表資料
平野修 2004 「古代甲斐國の山麓開発と御牧」「山梨県考古学論集」V 山梨県考古学協会
小西直樹 2004 「上野原町における古代神奈川の道路」「フォーラム古代都留郡を考える」発表資料
町田有弘 1996 「馬の表記方法に関する基礎的研究」「眉瀬」48-10
町田有弘 1993 「牧削当に関する一考察」「白山史学」29
宮沢公雄 1989 「後期山越から観た甲府盆地の様相」「山梨県考古学論集」II
宮沢公雄 2003 「古柏の動向と古代交通路」「山梨考古」90 山梨県考古学協会
宮沢公雄 2004 「古柏と古代の交通路」「山梨県考古学論集」V 山梨県考古学協会
村石真澄 1998 「甲斐の馬生産の起源」「動物考古学」10
村石真澄 2004 「甲斐の馬生産の起源」「山梨県考古学論集」V 山梨県考古学協会
山口英男 1994 「文献から見た古代牧馬の飼育形態」「山梨県史研究」2 山梨県教育委員会
山口英男 2004 「古々道跡2・4」「山梨県埋蔵文化財センター測定報告書第212案
山梨県教育委員会 2004 「古々道跡3・5」「山梨県埋蔵文化財センター測定報告書第213案



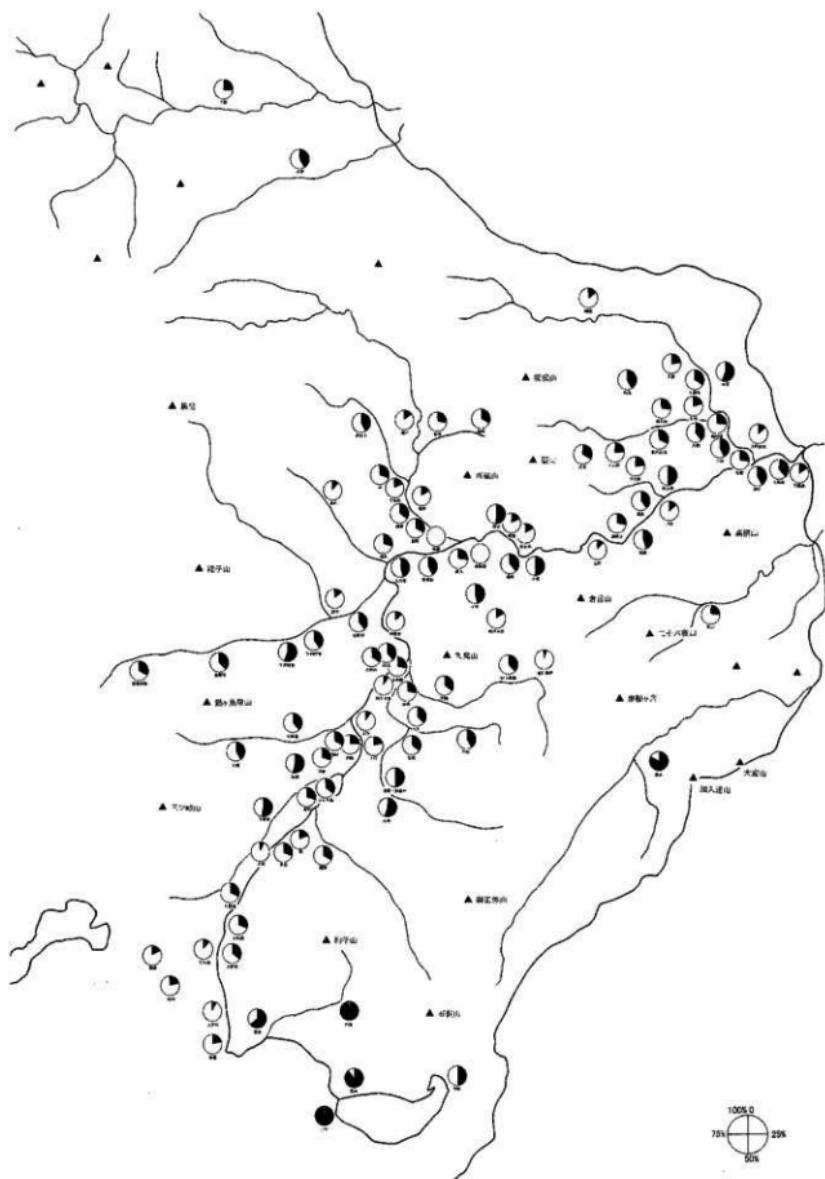
第1図 近世牛馬数 山梨郡・八代郡



第2図 近世牛馬保有率 山梨郡・八代郡



第3図 近世牛馬数 都留郡



第4図 近世牛馬保有率 都留郡

甲斐国志 村里部 山梨郡 (表1)

昭和年	明治22年	地域	村	枝郷	高(エキセキ)	戸	口	男	女	馬	牛	牛馬代	保有率
一富村	栗原筋51	下袖木村			162,638	72	266	138	128	6	0	6	8.3%
二富村	栗原筋52	上袖木村			78,507	51	198	100	98	5	0	5	9.8%
一富村	栗原筋53	川浦村	上萩原、葛原、平、大科		123,421	109	415	216	199	16	0	16	14.7%
三富村	万力筋46	下萩原村			32,467	23	83	50	33	4	0	4	17.4%
二富村	三富村	万力筋47	德和村		84,643	85	322	175	147	7	0	7	8.2%
三富村	三富村	万力筋48	下巻口村	以後訛、古巻番	42,106	31	126	62	66	5	0	5	16.1%
二富村	三富村	万力筋49	上巻口村	青井、赤浦、片岡、巻口	22,086	45	173	87	86	0	6	6	13.3%
牧丘町	課訪村	万力筋43	袖口村	山田、中野、大内、中野、大内、中野、大内	388,122	161	551	285	266	17	0	17	10.6%
牧丘町	課訪村	万力筋44	伏住村	夷勝郡	338,831	93	341	174	167	16	0	16	17.2%
牧丘町	課訪村	万力筋45	成沢村		190,227	50	190	96	94	10	0	10	20.0%
牧丘町	中牧村	万力筋34	西保卜村	西保卜、小原、片岡、北、中保、西保、西保、西保	761,164	160	557	285	272	15	0	15	9.4%
牧丘町	中牧村	万力筋42	翁料村	翁料、翁料、翁料、翁料、翁料、翁料、翁料、翁料	115,185	302	1,081	547	534	80	0	80	26.5%
牧丘町	西保村	万力筋35	西保中村	西保、西保、西保、西保、西保、西保	308,268	155	568	289	279	48	0	48	31.0%
牧丘町	西保村	万力筋36	牧牛村	卜原、猿、立根、赤芝藪	259,445	123	454	222	232	42	0	42	34.1%
牧丘町	西保村	万力筋37	西保北村	西保、生瀬、鬼ノ平、上、下西	346,323	170	638	310	320	27	0	27	15.9%
牧丘町	課訪村	万力筋38	隼村		464,779	37	207	104	103	12	0	12	32.4%
牧丘町	課訪村	万力筋39	深平村	鳴小、所野	480,857	89	285	144	141	15	0	15	16.9%
牧丘町	課訪村	万力筋40	城古寺村		93,443	41	119	55	64	4	0	4	9.8%
牧丘町	課訪村	万力筋41	千野々宮村		236,120	53	215	103	112	5	0	5	9.4%
塙山市	大蘿村	栗原筋18	中萩原村		691,807	205	683	346	337	18	0	18	8.8%
塙山市	大蘿村	栗原筋22	上栗原野村	井掛田、宝室、鹿嶋	456,919	75	270	137	133	8	0	8	10.7%
塙山市	大蘿村	栗原筋23	下栗原野村	前原	490,220	62	198	96	102	4	0	4	6.5%
塙山市	奥野田村	栗原筋14	牛奧村	中原、南牛奥、鹿尻口、北牛奥	653,342	170	645	316	329	11	0	11	6.5%
塙山市	奥野田村	栗原筋15	西ノ原村		258,281	50	166	76	70	3	0	3	6.0%
塙山市	奥野田村	栗原筋31	施野村		893,536	95	306	153	153	5	0	5	5.3%
塙山市	奥野田村	栗原筋32	西山門田村	北祖、南祖	572,545	66	235	113	122	2	0	2	3.0%
塙山市	奥野田村	栗原筋32-2	西広門田村	南祖	(375,7167)								
塙山市	奥野田村	栗原筋32-3	西山門田村	北祖	(196,8283)								
神金町	栗原筋19	上萩原村	上切、下切		772,234	293	1,017	500	517	66	0	66	22.5%
塙山市	神金村	栗原筋20	上小田原村		169,430	60	208	103	105	11	0	11	18.3%
塙山市	神金村	栗原筋21	下小山原村	本道、卜多瀬	327,693	74	204	110	94	2	2	4	5.4%
塙山市	七里村	栗原筋17	下萩原村		409,196	60	217	110	107	3	0	3	5.0%
塙山市	七里村	栗原筋27	千野村		1038,855	203	683	326	357	8	0	8	3.9%
塙山市	七里村	栗原筋28	上於曾村		799,957	95	347	172	175	5	0	5	5.3%
塙山市	七里村	栗原筋29	下於曾村		998,147	120	411	203	208	16	0	16	13.3%
塙山市	七里村	栗原筋30	赤尾村		588,431	85	290	134	156	12	0	12	14.1%
塙山市	七里村	栗原筋33	上堀後村		513,109								
塙山市	七里村	栗原筋33-2	上塙後村	中府勤務支配山/手耕役知	(330)	63	209	108	101		0	0	
塙山市	七里村	栗原筋33-2	上塙後村		(183,109)	30	105	50	55	2	0	2	6.7%
塙山市	七里村	栗原筋34	下塙後村		454,092	83	289	157	132	5	0	5	6.0%
塙山市	玉宮村	栗原筋24	竹森村	上切、下切	971,265								
塙山市	玉宮村	栗原筋24-2	竹森村	中府勤務支配山/手耕役知、上切	(502,404)	90	307	158	149				
塙山市	玉宮村	栗原筋24-3	竹森村	下切	(468,861)	75	274	141	133	15	0	15	20.0%
塙山市	玉宮村	栗原筋25	福生里村		45,618	27	96	43	53	2	0	2	7.4%
塙山市	玉宮村	栗原筋26	平沢村	板屋、中源、美平、深澤	149,115	41	138	69	69	3	0	3	7.3%
塙山市	松里村	栗原筋35	上井尻東方		426,054	61	234	116	118	5	0	5	8.2%
塙山市	松甲村	栗原筋36	上井尻西方		324,743	81	319	159	160	10	0	10	12.3%
塙山市	松里村	栗原筋48	-山市場村	乙原、弓削原	991,496								
塙山市	松里村	栗原筋48-2	三日市場村	-山市郷		95	325	160	165	19	0	19	20.0%
塙山市	松里村	栗原筋48-3	-日市場村	乙原弓削		68	264	130	134	9	0	9	13.2%
塙山市	松里村	栗原筋49	小野坂村		697,709	101	360	185	175	10	0	10	9.9%
塙山市	松里村	栗原筋50	藤木村		702,998	133	447	223	224	13	0	13	9.8%
勝沼町	祝村	大石和筋12	下岩塙村	坂井、田中	1051,687	159	619	313	306	8	0	8	5.8%
勝沼町	祝村	大石和筋13	上岩塙村		776,724	570	270	299	271	12	0	12	8.9%
勝沼町	祝村	大石和筋15	梅井村	北、南、祖、福	290,040	48	189	93	96	6	0	6	13%
勝沼町	勝沼村	栗原筋10	勝沼南		1198,649	213	936	480	456	33	0	33	15.5%
勝沼町	休息村	栗原筋8	休息村		589,906	94	398	208	190	3	0	3	3.2%
勝沼町	小佐手村	栗原筋9	小佐手村		701,9891								
勝沼町	小佐手村	栗原筋9-2	小佐手村	中府勤務支配山/手耕役知	(670)	114	389	195	194	0	0	0	0%
勝沼町	小佐手村	栗原筋9-3	小佐手村		(31,9891)	21	68	32	36	0	0	0	0%
勝沼町	努力村	栗原筋6	努力村		890,180	212	457	229	228	6	0	6	2.8%

昭和59年	明治22年	地域	村	枝郷	高(石川町)	戸	口	男	女	馬	牛	牛馬計	保有率
勝沼町	巣山村	栗原筋13	巣山村		779,833	196	789	405	384	19	0	19	9.7%
勝沼町	山村	栗原筋16	山村		888,4266	119	396	195	201	5	0	5	4.2%
勝沼町	鶴塚村	栗原筋7	鶴塚村		343,684	51	216	112	104	2	0	2	3.9%
大和村	鶴塚宿	栗原筋11	鶴塚宿		109,675	65	221	106	115	9	0	9	13.8%
大和村	初鹿野村	栗原筋12	初鹿野村	日向、喜多、木之浦、久林、河内、上河原、新田、御前	319,879	244	924	493	431	19	0	19	7.8%
大和村	大石和筋14	鶴塚宿	日影、長坂		135,563	78	277	147	130	0	0	0	0%
山梨市	上万力村	万力筋24	上方力村		971,704	160	657	329	328	9	0	9	5.6%
山梨市	岩手村	万力筋33	岩手村	東郷、西組	806,406	150	641	305	336	18	0	18	12.0%
山梨市	加納岩村	栗原筋40	上石森村		516,710	84	292	150	142	0	0	0	0%
山梨市	加納岩村	栗原筋41	下石森村	上組、下組	399,263	75	216	123	93	2	0	2	2.7%
山梨市	加納岩村	栗原筋42	大野村		698,436	110	384	190	194	3	0	3	2.7%
山梨市	加納岩村	栗原筋43	下神内川村		474,862	82	307	151	156	4	0	4	4.5%
山梨市	加納岩村	栗原筋44	上神内川村		613,449	83	291	149	142	0	0	0	0%
山梨市	日下部村	栗原筋37	下井尻村		464,187	69	242	122	120	5	0	5	7.2%
山梨市	日下部村	栗原筋45	小原村西分		381,647	75	217	109	108	7	0	7	9.3%
山梨市	日下部村	栗原筋46	小原村東分		436,820	64	216	111	105	3	0	3	4.7%
山梨市	日下部村	栗原筋47	七日市場村	石島	448,265	80	272	135	137	3	0	3	3.8%
山梨市	後屋敷村	栗原筋38	東後屋敷村		427,422	63	247	135	112	6	0	6	9.5%
山梨市	後屋敷村	栗原筋39	西後屋敷村	鳴居寺、木戸、新町、豊後、吉峰	1025,577	141	505	254	251	12	0	12	8.5%
山梨市	日川村	栗原筋1	一町田中村		580,502	72	456	220	236	1	0	1	1.4%
山梨市	日川村	栗原筋2	取石村		560,869	93	405	206	199	9	0	9	9.7%
山梨市	日川村	栗原筋3	下栗原宿		627,435	128	385	199	186	20	0	20	15.6%
山梨市	日川村	栗原筋4	上栗原村		419,399	66	248	120	128	2	0	2	3.0%
山梨市	日川村	栗原筋5	中村		337,347	47	201	97	104	3	0	3	6.4%
山梨市	平等村	万力筋20	上岩下村	湯ノ瀬、山寺、小田畠、新町	459,678	86	361	175	186	4	0	4	4.7%
山梨市	平等村	万力筋21	落合村		558,445	80	350	193	157	4	0	4	5.0%
山梨市	平等村	万力筋22	正徳寺村		756,703	98	384	205	179	6	0	6	6.1%
山梨市	平等村	万力筋23	山根村		222,441	76	252	128	124	4	0	4	5.3%
山梨市	八幡村	万力筋25	八幡南村		490,262	99	387	184	203	8	0	8	8.1%
山梨市	八幡村	万力筋26	八幡北村		533,725	166	566	277	289	14	0	14	8.4%
山梨市	八幡村	万力筋27	江曾原村		353,995	82	290	151	139	10	0	10	12.2%
山梨市	八幡村	万力筋28	市河村		783,236	180	684	340	344	7	0	7	3.9%
山梨市	八幡村	万力筋29	大仁村		555,840	77	241	111	130	3	0	3	3.9%
山梨市	八幡村	万力筋30	堀之内村		491,943	71	269	128	141	2	0	2	2.8%
山梨市	八幡村	万力筋31	水口村	丸山、山口	345,370	84	259	125	134	5	0	5	6.0%
山梨市	八幡村	万力筋32	切妻村	新石原戸16	108,000	72	300	159	141	18	0	18	25.0%
春日居町	岡部村	万力筋10	須口村		1334,421	82	337	170	167	5	0	5	6.1%
春日居町	岡部村	万力筋11	袖条村		95,572	22	87	42	45	3	0	3	13.6%
春日居町	岡部村	万力筋14	田附村		212,251	92	395	187	208	14	0	14	15.2%
春日居町	春日居村	万力筋12	佛野井村		523,913	28	103	50	53	5	0	5	17.9%
春日居町	春日居村	万力筋13	吉本村		166,459	21	72	33	39	0	0	0	0%
春日居町	春日居村	万力筋15	小松村		458,038	56	187	87	100	2	0	2	3.6%
春日居町	春日居村	万力筋16	加茂村		127,205	19	82	41	41	14	0	14	73.7%
春日居町	春日居村	万力筋17	別田村		314,458								
春日居町	春日居村	万力筋17-2	別田村	中席善支派山/手御役知	(137,977)	9	41	18	23	0	0	0	0%
春日居町	春日居村	万力筋17-3	別田村		(176,481)	24	104	54	50	1	0	1	4.2%
春日居町	春日居村	万力筋18	桑戸村		590,658	127	447	239	208	2	0	2	1.6%
春日居町	春日居村	万力筋19	下岩下村		398,567	60	228	116	112	6	0	6	10.0%
			合 計		48116,1252	9628	35095	17669	17426	967	8	975	10.0%

八代郡 (表2)

昭和59年 理治22年	地域	村	枝郷	高(五石合升)	戸	口	男	女	馬	牛	牛馬計	保有率
石和町	石和村	大石和筋1	石和宿	下市郡、菊島	608,653	191	685	338	347	15	0	15%
石和町	石和村	大石和筋2	中島		314,816	28	112	50	62	0	0	0%
石和町	石和村	大石和筋3	八田村	新屋	344,832	19	82	43	39	2	0	21%
石和町	石和村	大石和筋4	川中島村		642,527	94	361	175	186	4	0	4%
石和町	石和村	小石和筋1	四日市場村		1098,150	77	298	146	152	3	0	34%
石和町	石和村	小石和筋2	広瀬村	馬場	928,813	56	207	101	106	3	0	35%
石和町	岡部村	万力筋6	松木村		864,114	100	381	198	183	7	0	70%
石和町	岡部村	万力筋9	山崎村		102,506	30	109	53	56	1	0	13%
石和町	英村	大石和筋40	上平井村		370,596	40	124	59	65	3	0	8%
石和町	英村	大石和筋41	下平井村		705,402	73	234	112	122	10	0	14%
石和町	英村	大石和筋42	川山村		490,185	83	325	200	125	9	0	911%
石和町	富士見村	小石和筋10	東油川村		590,455	43	169	84	85	2	0	25%
石和町	富士見村	小石和筋1	唐原村	新屋、下屋、御物御屋	839,264	75	299	138	161	3	0	34%
石和町	富士見村	小石和筋4	小石和村	北郷、南郷	1177,33919	99	384	185	199	7	0	77%
石和町	富士見村	小石和筋4-2	小石和村	北郷	(558,012)							
石和町	富士見村	小石和筋3	小石和村	南郷	(619,32719)							
石和町	富士見村	小石和筋5	河内村		552,491	42	154	75	79	2	0	25%
石和町	富士見村	小石和筋6	今井村		386,479	31	112	52	60	0	0	0%
石和町	富士見村	小石和筋7	東森柳村		401,815	40	145	73	72	2	0	25%
石和町	富士見村	小石和筋8	井戸村		781,126	48	181	91	90	2	0	24%
石和町	富士見村	小石和筋9	砂原村		578,658	55	210	103	107	2	0	24%
一宮町	相興村	大石和筋10	南野呂村	辻、草向	483,500	63	225	120	105	5	0	58%
一宮町	相興村	大石和筋11	北野呂村	町田	366,967	44	169	89	80	0	0	0%
一宮町	相興村	大石和筋12	上矢作村		671,040	85	435	233	202	7	0	78%
一宮町	相興村	大石和筋13	中尾村		847,547	105	394	185	209	4	0	44%
一宮町	石巒村	大石和筋16	下木寺村		213,038	52	192	100	92	3	0	36%
一宮町	石巒村	大石和筋17	地藏坂村		171,090	33	116	62	54	2	0	26%
一宮町	石巒村	大石和筋18	石村	北郷、南郷	455,149							
一宮町	石巒村	大石和筋18-2	石村	北郷	53	211	108	103	3	0	26%	
一宮町	石巒村	大石和筋18-3	石村	南郷	20	105	53	52	0	0	0%	
一宮町	一桜村	大石和筋19	一ノ宮村		640,5237	77	334	169	165	4	0	45%
一宮町	一桜村	大石和筋20	北郡塚村		369,632	44	171	88	83	0	0	0%
一宮町	一桜村	大石和筋21	本桑塚村		255,081	36	152	77	75	1	0	13%
一宮町	一桜村	大石和筋22	木木村		562,696	82	299	149	150	3	0	34%
一宮町	一桜村	大石和筋6	下矢作村		272,959	32	147	69	78	1	0	13%
一宮町	一桜村	大石和筋7	小城村		407,649	35	152	77	75	4	0	411%
一宮町	一桜村	大石和筋39	坪井村		758,908	52	191	88	103	2	0	24%
一宮町	一桜村	大石和筋40	南田中村		726,478	95	355	182	173	1	0	11%
一宮町	一桜村	大石和筋24	四分村		476,663	82	271	136	135	3	0	34%
一宮町	一桜村	大石和筋35	東聚居村	林家、裏室	392,6449	70	254	117	137	4	0	46%
一宮町	一桜村	大石和筋36	櫛立村		39,868	14	50	23	27	0	0	0%
一宮町	一桜村	大石和筋37	金田村		522,1626	40	174	92	82	6	0	615%
一宮町	一桜村	大石和筋38	竹原田村	大塚、若葉	770,2734	84	263	133	130	6	0	67%
一宮町	御代咲村	大石和筋23	塙田村	町屋	585,944	83	307	157	150	7	0	78%
一宮町	御代咲村	大石和筋25	七塙村		359,576	57	182	97	85	3	0	35%
一宮町	御代咲村	大石和筋26	神沢村		198,543	33	137	70	67	0	0	0%
一宮町	御代咲村	大石和筋27	東新居村		320,490	58	260	143	137	3	0	35%
一宮町	御代咲村	大石和筋28	御新居村		303,384	42	202	99	103	3	0	37%
一宮町	御代咲村	大石和筋29	門前村		40,056	9	38	19	19	0	0	0%
一宮町	御代咲村	大石和筋30	新登村	新登戸、山木戸	263,196	21	87	34	53	0	0	0%
一宮町	御代咲村	大石和筋31	市藏村		453,413	69	265	126	129	0	0	0%
御坂町	上黒脚村	大石和筋33	上黒脚村		1220,576	207	832	416	416	30	0	3014%
御坂町	金牛村	小石和筋22	尾山村		378,320	72	274	140	134	3	0	34%
御坂町	金牛村	小石和筋33	下野原村		265,5025	71	280	135	145	3	0	34%
御坂町	金牛村	小石和筋35	榮台村		130,091	24	73	36	37	1	0	14%
御坂町	金牛村	小石和筋36	薺麥塚村		155,4523	47	119	57	62	3	0	36%
御坂町	下黒脚村	大石和筋32	下黒脚村		830,233	104	376	194	182	8	0	88%
御坂町	竹野原村	小石和筋31	大野寺村		320,754	106	435	212	223	2	0	22%
御坂町	錦村	小石和筋34	升上村		624,501	77	288	139	149	4	0	45%
御坂町	錦村	小石和筋37	八千歳村		244,874	65	275	113	132	4	0	46%
御坂町	錦村	小石和筋38	夏目原村		478,317	62	261	128	133	7	0	711%
御坂町	錦村	小石和筋39	二ノ宮村		820,906	108	390	199	191	5	0	55%

昭和59年	明治22年	地域	村里	枝郷	高(ヘクタール)	戸	口	男	女	馬	牛	牛馬計	保有率
御坂町	小石和庭40	金川原村			162,708	46	184	85	99	1	0	1	2%
御坂町	英村	大石和庭43	成田村		138,497	130	435	220	215	17	0	17	13%
御坂町	英村	大石和庭44	国郷村		445,190	20	68	32	36	0	0	0	0%
御坂町	藤野木村	大石和庭34	修ノ木村		133,275	50	219	110	109	7	0	7	14%
八代町	岡村	小山和庭25	岡村		370,714	70	282	141	141	7	0	7	10%
八代町	北八代村	小石和庭26	北八代村	下郷組、中郷組、竹内郷	131,984	145	515	265	250	7	0	7	5%
八代町	米倉村	小石和庭19	米倉村	小尾、高宮、大谷	663,277	94	351	173	178	4	0	4	4%
八代町	高家村	小石和庭26	高家村	小山町	767,757	97	384	193	191	7	0	7	7%
八代町	竹野原村	小石和庭27	竹井村		935,909	181	669	329	340	12	0	12	7%
八代町	竹野原村	小石和庭28	奈良原村		78,460	40	169	87	82	11	0	11	28%
八代町	井川村	小石和庭20	井川村		524,429	95	317	152	165	2	0	2	2%
八代町	増田村	小石和庭21	増利村		772,776	56	171	75	96	2	0	2	4%
八代町	増田村	小石和庭22	大間田村		315,710	35	128	68	60	3	0	3	9%
八代町	南八代村	小石和庭23	南八代村	後ノ上、春ノ上、馬見塚、原 (337)	1256,1687	40	163	79	84	2	0	2	5%
八代町	南八代村	小石和庭23	南八代村	伊那御前支配山手(御前加)	(919,1687)	119	460	243	217	5	0	5	4%
塊川村	圭林村	小石和庭12	三門村		197,507	40	172	87	85	0	0	0	0%
塊川村	圭林村	小石和庭13	石橋村		779,980	105	381	188	193	8	0	8	8%
塊川村	圭林村	小石和庭14	大坪村		572,965	48	188	97	91	0	0	0	0%
塊川村	圭林村	中都路2	坊ヶ崎新田		9,373	6	25	13	12	0	0	0	0%
塊川村	圭林村	五成村	大窪村		113,642	30	136	68	68	6	0	6	20%
塊川村	圭林村	五成村	小瀬坂村		385,9791	40	133	59	74	4	0	4	10%
塊川村	五成村	小石和庭17	前南田村		269,942	45	181	83	98	2	0	2	4%
塊川村	五成村	小石和庭18	小山村		200,572	28	131	60	71	1	0	1	4%
塊川村	寺尾村	中郡筋3	寺尾村	中寺尾、寺尾、開門	543,690	85	273	131	142	9	0	9	11%
塊川村	寺尾村	中郡筋1	藤岱村		834,909	172	630	301	329	15	0	15	9%
中道町	白井河原村	小石和庭11	白井河原村		952,640	95	399	191	208	5	0	5	5%
中道町	右上立村	中郡筋10	右上立村	七覚、善能	718,192	245	815	400	415	47	0	47	19%
中道町	右上立口	中郡筋6	上内山村	小林	346,223	56	210	100	110	5	0	5	9%
中道町	右上立口	中郡筋7	下向山村	佐久、金沢、松本	1038,112	97	365	173	192	7	0	7	7%
中道町	右上立口	中郡筋8	中棚村		285,664	36	112	55	57	5	0	5	14%
中道町	右上立口	中郡筋9	心経寺村	石乘屋	191,342	46	179	85	94	7	0	7	15%
中道町	上曾根村	中郡筋4	上曾根村	中田、別所、船山、白山、各曾根、原、下、御前	1415,711	156	677	334	343	11	0	11	7%
中道町	上曾根村	中郡筋5	下曾根村	東郷、西郷、中郷、北郷	1470,887	153	595	284	311	23	0	23	15%
豊富村	豊富村	中郡筋11	奥原村		366,984	91	401	198	203	5	0	5	5%
豊富村	豊富村	中郡筋12	木原村		700,890	106	398	194	204	9	0	9	8%
豊富村	豊富村	中郡筋13	高部村	角川、宇山	428,423	78	331	162	169	3	0	3	4%
集富村	集富村	中郡筋14	上大島柄村		937,1851	227	856	487	369	29	0	29	13%
集富村	集富村	中郡筋15	浅利村		469,298	112	471	221	250	5	0	5	4%
一焼町	上野村	西部筋2	上野村	久慈、町原、河原、上野、篠田	734,934	182	721	357	364	14	0	14	8%
三珠町	大塚村	中郡筋16	大塚村	室林、上原	1183,020	183	800	425	375	28	0	28	15%
一焼町	下九一色村	中郡筋17	烟波村	鹿丸村	17,138	16	50	30	20	3	0	3	19%
三珠町	下九一色村	中郡筋18	中山村	鶴丸14 雲水	20,601	29	134	63	71	20	0	20	69%
一焼町	下九一色村	中郡筋19	笠山村	鶴丸5	19,338	15	60	29	31	3	0	3	20%
三珠町	下九一色村	中郡筋21	高萩村	鶴丸5 古瀬	45,199	52	230	125	165	23	0	23	44%
一焼町	下九一色村	中郡筋22	二瓶村	鶴丸5	19,996	22	82	38	44	11	0	11	50%
三珠町	下九一色村	中郡筋23	下戸川村	鶴丸57	40,576	82	302	136	166	8	0	8	10%
市川大門町	市川大門村	西部筋1	市川大門村	落合、押沢、印原、戸田瀬	1916,629	923	3686	1842	1844	4	2	6	1%
市川大門町	高田村	西部筋2	白沢村		104,475	73	329	164	165	3	0	3	4%
市川大門町	高田村	西部筋3	高田村		896,190	229	1046	518	528	30	0	30	13%
市川大門町	豊和村	西部筋4	下大島居村	黒沢村	425,752	81	346	162	184	7	0	7	9%
市川大門町	豊和村	西部筋5	八尻村		742,352	287	1208	600	608	25	0	25	9%
市川大門町	八之尻村	西部筋5	山家村	#本郷村、北大島居、吉田、通水、野田、若狭、御前、御前、御前、御前	248,276	81	408	200	208	1	0	1	1%
市川大門町	山保村	西部筋6	山家村		350,240	198	843	412	431	36	0	36	18%
芦川村	鷺宿村	中郡筋27	鷺宿村	鷺宿126	117,424	129	460	238	222	4	1	5	4%
芦川村	上川村	小石和庭29	上川村		31,580	87	332	174	158	8	0	8	9%
芦川村	中芦川村	小石和庭30	中芦川村		53,624	89	333	173	160	5	0	5	6%
上九一色村	上九一色村	中郡筋25	櫻村	櫻村53 小森本	40,799	53	220	109	111	3	0	3	6%
上九一色村	上九一色村	中郡筋26	古瀬村	古瀬15 人見、弓削、唐原、志摩、本郷、本郷	94,778	218	886	452	436	8	0	8	4%
上九一色村	上九一色村	中郡筋28	精進村	鶴丸5	3,003	67	341	182	159	7	0	7	10%
上九一色村	上九一色村	中郡筋29	本郷村	鶴丸12	3,446	29	130	70	60	2	0	2	7%
				合計	58441,73609	10180	39856	19862	19954	768	3	771	8%

(注) 市蔵村、八千藏村で口数と男女計が合わないが、甲斐国志の数値に従った。

(表3)

昭和59年	明治22年	郡内	村里	棟数	高(石千井合)	戸	口	男	女	馬	牛	牛馬計	保有率
月波村	月波村	98	丹波村	69,637	208	1030	548	482	50	2	52	25.0%	
小資村	小資村	97	小資村	59,575	167	811	427	384	65	5	70	41.9%	
上野原町	麻村	103	川合村	120,693	88	468	232	236	13	0	13	14.8%	
上野原町	麻村	108	四方津村	196,764	100	489	249	240	49	0	49	49.0%	
上野原町	麻村	109	松畠村	89,294	45	235	120	115	12	0	12	26.7%	
上野原町	麻村	110	八沢村	171,23	78	380	196	184	33	0	33	42.3%	
上野原町	上野原村	94	上野原宿	638,419	410	1875	941	934	55	0	55	13.4%	
上野原町	大鶴村	90	大龜村	77,053	45	208	104	104	10	0	10	22.2%	
上野原町	大鶴村	91	大曾竹村	28,447	30	182	93	89	16	0	10	33.3%	
上野原町	大鶴村	92	大鶴村	120,27	82	348	184	164	32	0	32	39.0%	
上野原町	人越村	93	越川宿	153,858	62	296	149	147	16	0	16	25.8%	
上野原町	大日村	83	大日村	81,212	61	293	145	148	20	0	20	32.8%	
上野原町	大日村	84	上大野村	155,505	97	467	230	237	22	0	22	22.7%	
上野原町	大日村	85	卜大野村	163,317	107	480	249	231	24	0	24	22.4%	
上野原町	甲東村	86	野田宿	145,206	63	574	305	269	31	0	31	49.2%	
上野原町	甲東村	87	桑久保村	73,07	66	304	156	148	18	0	18	27.3%	
上野原町	甲東村	88	相見村	30,976	35	192	102	90	15	0	15	42.9%	
上野原町	甲東村	89	芦垣村	58,222	39	185	102	83	8	0	8	20.5%	
上野原町	烏田村	104	上嶋鳥村	164,174	104	488	232	256	40	0	40	38.5%	
上野原町	烏田村	105	下嶋鳥村	178,839	61	293	131	162	10	0	10	16.4%	
上野原町	烏田村	111	新田村	93,559	75	397	192	205	31	0	31	41.3%	
上野原町	西原村	96	西原村	156,782	180	923	473	450	100	0	100	55.6%	
上野原町	福原村	95	福原村	513,342	421	2135	1121	1014	65	0	65	15.4%	
大月市	奥川村	101	立野村	137,732	67	294	136	158	8	0	8	11.9%	
大月市	奥川村	102	堀越村	105,548	60	342	185	157	27	0	27	25.0%	
大月市	奥川村	106	綿野上村	200,508	100	453	236	217	28	0	28	28.0%	
大月市	奥川村	107	新立村	42,902	34	191	96	95	13	0	13	38.2%	
大月市	富浜村	80	宮谷村	251	99	484	240	244	50	0	50	50.5%	
大月市	富浜村	81	裕若村	39,408	44	191	107	84	8	0	8	18.2%	
大月市	富浜村	82	鳥洲宿	419,797	304	1485	782	703	50	0	50	16.4%	
大月市	大原村	64	殿上村	131,055	55	221	112	109	15	0	15	27.3%	
大月市	大原村	65	猿橋宿	246,115	144	638	328	310	0	0	0	0%	
大月市	大原村	66	小沢村	90,686	89	343	179	164	41	0	41	46.1%	
大月市	大原村	67	朝日小沢村	33,542	43	190	168	82	7	0	7	16.3%	
大月市	大原村	99	蘿崎村	516,355	128	704	360	344	50	0	50	39.1%	
大月市	大原村	100	小路村	136,789	53	242	127	115	27	0	27	50.9%	
大月市	蘿崎村	68	浅利村	87,004	58	277	146	131	17	0	17	29.3%	
大月市	蘿崎村	69	菅瀬村	200,931	79	353	181	172	0	0	0	0%	
大月市	蘿崎村	70	岩殿村	69,754	45	201	101	100	18	0	18	40.0%	
大月市	蘿崎村	71	煙許村	305,643	116	575	290	285	40	0	40	34.5%	
大月市	蘿崎村	72	巖山村	57,361	82	342	175	167	10	0	10	12.2%	
大月市	広里村	60	真木村	382,158	239	1072	553	519	36	0	36	15.1%	
大月市	広里村	61	花畠宿	364,858	155	725	365	360	60	0	60	38.7%	
大月市	広里村	62	大月宿	226,652	103	450	218	232	47	0	47	45.6%	
大月市	広里村	63	猪崎宿	328,178	90	366	192	174	38	0	38	42.2%	
大月市	七保村	73	林村	27,936	26	152	81	71	8	0	8	30.8%	
大月市	七保村	74	矢真子村	35,89	50	284	144	140	21	0	21	42.0%	
大月市	七保村	75	瀬戸村	110,16	96	552	272	280	15	0	15	15.6%	
大月市	七保村	76	駒ヶ吉村	84,123	42	207	109	98	11	0	11	26.2%	
大月市	七保村	77	浅川村	68,753	66	288	148	140	21	0	21	31.8%	
大月市	七保村	78	越野村	241,994	137	610	304	306	24	0	24	17.5%	
大月市	七保村	79	下和田村	176,348	92	474	256	218	17	0	17	18.5%	
大月市	初狩村	58	中初狩宿	331,570	108	531	259	272	60	0	60	55.6%	
大月市	初狩村	59	下初狩宿	337,118	151	672	357	315	60	0	60	39.7%	
大月市	笛子村	55	黒野田宿	121,006	93	441	214	227	31	0	31	33.3%	
大月市	笛子村	56	阿弥陀海道宿(芦野村)	84,939	78	360	179	161	30	0	30	38.5%	
大月市	笛子村	57	白野宿	103,612	101	422	211	211	23	0	30	38.5%	
都留市	壬生村	39	四日市場村	402,603	105	428	211	217	10	0	10	9.5%	
都留市	壬生村	40	古川渡村	322,211	91	344	185	159	25	0	25	27.5%	
都留市	壬生村	41	川茂村	107,703	52	207	105	102	20	0	20	38.5%	
都留市	丁生村	42	小形山村	253,835	153	702	356	346	52	0	52	34.0%	
都留市	千生村	43	田野倉村	368,705	170	712	356	356	22	0	22	12.9%	

昭和59年	明治22年	都内	村名	枝郷	戸	口	男	女	馬	牛	馬群	保有率
都留市	千生村	44	片倉村	九鬼	168,504	73	338	170	168	20	0	20.27%
都留市	盛平村	45	与禪村	日向・日影	48,196	75	341	171	170	25	0	25.33%
都留市	森里村	46	朝日・馬場村		73,326	73	340	181	159	28	0	28.38%
都留市	森平村	47	朝日・曾爾村	大平・久保・神原	100,401	120	586	290	296	35	0	35.6.0%
都留市	二吉村	52	法能村		153,854	102	448	224	224	36	0	36.35.3%
都留市	三吉村	53	戸沢村		87,896	75	315	163	152	30	0	30.40.0%
都留市	二吉村	54	玉川村		101,038	41	172	76	96	15	0	15.36.6%
都留市	開地村	56	菅野・熊井戸村	細野・大津	35,319	80	406	188	218	40	0	40.50.0%
都留市	鹿地村	51	小野村		104,903	73	344	173	171	40	0	40.54.8%
都留市	谷村	1	上谷村	御前・御代・御代・中河・下河・御代	817,781	242	1554	785	769	52	0	52.21.5%
都留市	谷村	2	上谷村	御前・御代・御代・中河・下河・御代	629,479	285	1346	681	665	30	0	30.10.5%
都留市	宝村	32	川郷村		43,005	16	71	35	36	4	0	4.25.0%
都留市	宝村	33	港原村		43,446	15	47	21	26	4	0	4.26.7%
都留市	宝村	34	平奈村		61.9	62	274	140	134	18	0	18.29.0%
都留市	宝村	35	加賀村		27,001	37	162	78	84	20	0	20.54.1%
都留市	宝村	36	大幡村		289,914	180	817	420	397	75	0	75.41.7%
都留市	宝村	37	中津森村		226,587	65	330	166	164	20	5	25.38.5%
都留市	宝村	38	会井村		68,979	37	143	79	64	15	0	15.40.5%
都留市	桂村	3	十日市場村		362,906	103	671	344	327	36	0	36.35.0%
都留市	桂村	4	夏村		696,327	241	1035	525	510	72	0	72.29.9%
都留市	桂村	5	廣畠村		372,209	222	862	453	409	72	0	72.32.4%
都留市	桂村	6	境村		205,143	150	647	311	336	30	0	30.20.0%
西桂町	桂村	7	見元村		198,702	92	397	196	201	28	0	28.30.4%
西桂町	桂村	8	小沼村		607,739	349	1482	671	811	25	0	25.7.2%
西桂町	桂村	9	下越地村		191,665	103	504	258	246	55	0	55.53.4%
秋山村	秋山村	48	秋山村		239,709	391	1861	941	920	93	0	93.23.8%
道志村	道志村	49	道志村	大原・小原・七ヶ原・八ヶ原・人井原・御代原・御代原・御代原・御代原・御代原	136,996	342	1735	868	867	280	0	280.81.9%
富士吉田市	明見村	11	小唄見村		205,970	249	871	441	430	71	0	71.28.5%
富士吉田市	明見村	12	大明見村		155,829	149	604	304	300	52	0	52.34.9%
富士吉田市	桂村	10	上暮地村		185,35	201	731	378	353	62	0	62.30.8%
富士吉田市	福地村	18	新屋村		56,483	135	529	271	258	30	0	30.22.2%
富士吉田市	福地村	19	上占山村		628,511	355	1304	673	631	26	0	26.7.8%
富士吉田市	福地村	21	松山村		35,886	111	451	230	221	25	0	25.22.5%
富士吉田市	瑞穂村	20	下占山村		889,186	508	2025	1045	980	60	0	60.11.8%
富士吉田市	瑞穂村	22	新立村		285,755	229	944	540	404	40	0	40.17.5%
忍野村	忍野村	13	忍草村		30,236	123	429	229	200	79	0	79.64.2%
忍野村	忍野村	14	内野村		68,598	92	652	332	320	90	0	90.97.8%
山中湖村	中野村	15	平野村		24,615	62	250	132	118	30	0	30.48.4%
山中湖村	中野村	16	長池村		3,104	34	172	88	84	30	0	30.88.2%
山中湖村	中野村	17	山中村		26,549	76	360	194	166	75	0	75.98.7%
河口湖町	大石村	29	大石村		199,631	141	601	301	300	41	0	41.29.1%
河口湖町	河口村	30	川口村		347,144	271	1128	568	560	22	0	22.8.1%
河口湖町	河口村	31	御川村		41,156	63	270	135	135	21	0	21.33.3%
河口湖町	木立村	24	木立村		218,385	191	1176	591	585	42	0	42.22.0%
河口湖町	船津村	23	船津村		201,765	170	897	450	447	65	0	65.38.2%
鷲山村	鷲山村	25	鷲山村		114,241	103	478	270	208	30	0	30.29.1%
鳴沢村	鳴沢村	27	成沢村		65,849	238	972	482	490	80	0	80.33.6%
足和田村	西湖村	28	長浜村		36,727	58	316	160	156	20	0	20.34.5%
足和田村	鳴沢村	26	大瀬村		56,851	40	133	68	65	8	0	8.20.0%
足和田村	西湖村	30	西湖村	鷲孔39	3,141	102	446	240	206	11	0	11.11%
			合計		20914,8005	13747	63545	32375	31170	3977	12	3996.32.4%

註

(二) 抽稿

- ア 一二〇一「山梨県の中世石仏—陽刻地蔵菩薩板碑」—中斐の美術・建
造物・城郭 羽中田壯雄先生喜寿記念論文集刊行会編 岩田書院
- イ 一二〇二「山梨県の中世石仏—陽刻六地蔵板碑を中心に—」—地域考
古学の展開 村田文夫先生還暦記念論文集
- ウ 一二〇三「山梨県の中世石仏—一石二仏陽刻地蔵菩薩板碑」—新世
紀の考古学 大塚初重先生喜寿記念論文集
- エ 一二〇一「山梨県の中世石仏—地蔵石仏(光背形)を中心として—」
【研究紀要】一八 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- オ 一二〇四「山梨県の中世石仏—阿弥陀三尊石仏」—山梨県考古学協
会誌 一四 山梨県考古学協会
- カ 一二〇三「山梨県の中世石仏—塙山市延命院の十三仏」—研究紀要
一〇 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (一) 山梨県 一九九九「山梨県史」文化財編
- (二) 甲府市 一九九八「甲府市の石像物」
- (四) 秋山村 一九九一「秋山村誌」
- (五) 「甲斐国志」江戸時代 文化一年(一八一四)
- (六) 一(七) 八代町役場 一九八三「八代町誌」
- (八) 註二に同じ
- (九) 持田友宏 一九九二「甲斐の板碑」—国中地方の基礎調査 クオリ
(一〇) ア 山梨県 一二〇四「山梨県史」中世 資料編
イ 塙山市 一九八二「塙山市史」資料編
- (一一) 一(三) 註一〇に同じ
- (一四) 註二に同じ

文堂

(二六) 註一〇に同じ

(二七) 山梨県教育委員会・山梨県土木部 一二〇〇三「甲府城跡稲荷橋整
備報告書」山梨県埋蔵文化センター調査報告書第100号

(二八) 一(九) 註二に同じ

(二九) 註一五に同じ

参考文献

- 磯貝正義・飯田文弥 一九七三「山梨県の歴史」 山川出版社
磯貝正義 一九七七「定本武田信玄」 新人物往来社
佐藤(佐野)勝廣 一九七八「甲斐の板碑(その二) 国中地方の地蔵陽
刻板碑」丘陵 第六号 甲斐丘陵考古学研究会

銘文が仮に後世に追刻されたものとしても、特に安坐形式で、しかも簡状の大袖形態をとる点を重要視すれば、その盛行した近い時期に造られたものと考えるのが妥当なところといえよう。これから紀年銘の、「一四世紀後半（第四四半世紀）」この時期を考えているところで、新しくみても一五世紀前半代を下らないものと考えている。

三 石仏形態

本石仏について奥壁の銘文から地蔵菩薩像としたが、今一度検討を加えてみたい。それは、これまで県内で確認された中世の地蔵石仏のほとんどが、立・坐像とも胸についた右手に錫杖、左手に宝珠を捧げる形態あり、左袖に浅いV字状の窪みがみられるのみで、簡状をとらないことから大きな違いをみせており、地蔵菩薩像と捕らえてよいのかということである。

先ず手を前方に突き出す形態の木造仏例を県内に拾うと、福光園寺吉祥天坐像、広嚴院地蔵菩薩坐像などを近い形態として既に取り上げたところ

である。時期がやや下り、袖も小振りな例として、早川町常昌院地蔵菩薩坐像（明治一〇年前後か、一五〇・二〇）も同様な簡状の形態をみせるが、いずれにしても数すくない。吉祥天坐像と地蔵菩薩坐像といった、違う二仏において簡状の大袖を確認できる。県外では、先に述べた平安時代末ころ前後の木造地蔵坐像に多くの簡状の大袖を確認でき、近くでは静岡県韋山市頼成寺の鎌倉時代とされる地蔵坐像などがある。

石仏はどうかというと、これらの木造仏に近似する形態のものを今までに確認したことはない。最も近い例として上げられるのが、甲府市塙澤寺の丸彌地蔵坐像（鎌倉時代）であろう。これは足組も含めて相対的にみた結果であるが、しかし、これとても右手袖は簡状形態をとるもの、左手袖は膝上に載せ宝珠を執っていることから、そこには簡状の形態を全くみることができない。ただ既に述べたように左手の袖に実態として突出は確認できないのであるが、左手が屈臂して手首を膝の上に載せているもの

で、前方に突出する袖であることは確認できる。これが仮に捧げる形態をとるとするならば、簡状の作りとなることは必定かと考えられ、本石仏に最も近い形態といえないこともない。

このように石造仏と木造仏といった違い、またその頻度は別として、比較的長期間にわたり簡状の大袖形態の袖が造られていたことを、また合わせて地蔵像の袖形態として多数の例を確認することができた。従つてこれらから考えられることは、本石仏もその影響で造られたものと捕らえることもでき、かつ袖形態などから承安年間以前に造られたもので、どちらかといえば奥壁に記された承和三年の「四世紀末に造られた地蔵菩薩坐像」と考えて大過ないものといえよう。そして形態としては、木造地蔵菩薩坐像のように両手を屈臂して、左手は仰いた掌上に宝珠を捧げ、右手に錫杖を握り結跏趺坐する地蔵菩薩坐像ということになる。

四 おわりに

地蔵塚石仏について長々と検討を加えてきた。この中で底部形態や袖形態など、その僅かな形態的特徴からではあるが、奥壁に彫らされている永和三年に造られたと考えることが、それほど唐突なものでないという結論に達した。冒頭で述べたように、鎌倉時代前後の石仏の僅かな本県にとつて、貴重な資料となることであろう。また、石仏の底部が大凡てあれ形態変するものとすれば、さるに漸る時期の石仏を探る手立てとなるもので、その意味で一層重要な存在といえよう。実際、甲斐市（旧双葉町）駒沢にあら阿弥陀如来坐像は、その候補となるものとみている。袈裟の衣文の彫法や袖の形態に古色をみせ、膝も僅かに突出をみせるような形態であり、今後の調査が待たれるところである。

最後に、資料の図化にあたり、ご援助、ご教示などをいただいた五味鉄藏氏、伊藤修一氏に厚くお礼申し上げたい。

石仏より以前の時期のものとなるが、地蔵像の形態からすれば、その時期を大きく測ることはできないであろう。さらにはこれら三者は同様な葉脈状の文様形態のものであるが、その形態には本石仏と基本的な大きな違いをみせる。それは葉脈の方向が本石仏とは、全く反対方向となる下方に広がる形態なのである。このことは本石仏のような葉脈状の文様は、具体的な時期を示せないものの、先ず文保二年以前を中心とした時期を想定できる根拠の一となるものといえる。なお、このことは奥壁に彫られた永和二年の南北朝の時期ごろに、本石仏の造られた可能性を想定する妨げとはならないであろう。

(三) 年代

奥壁の銘文、石仏の形態から、石仏の造られた時間などについて考えてきた。追刻が考えられているところの銘文であるが、この奥壁に刻まれた年代に、本石仏の造られた可能性を想定しても、差ほどの違和感は感じられない。一方、石仏形態には、既に述べたようなことから、中世の石仏であることの先ず確認してよいのではないだろうか。さらに、その前半代の時期を想定することも、可能といった状況を持ち合わせているものであることから、いずれにしても中世の中でも古い時期を含むものと考えている。

次にこの年代について、石仏の底部横断面形態（以下底部形態）から、補強を試みたい。

県内の石仏の國化作業をする中で、時代によつてその底部形態に違いのみられることが、驟げながら確認されてきている。詳しくは別稿にゆずるが、大きくなは古い時期の三角形（台形）を基本とした底部形態から、時間がともに次第に橢円形、長方形へと変化をみせるというものである。ただしこれはあくまで基準であり、最終的には石仏の像容、形法などを加味した総合判断となるが、簡易の検討方法としては有効な方法ではないかと考えている。

本石仏の底部形態は、既に述べたように膝頭の突出状態はみられないのであるが、やや膝の張った三角形に近い精円形を呈するものである。年代の分かっている最も古い時期のものに、塙市延命院十二仏のうちの大永仏がある。この大永仏は、五体確認されているが、いずれも底部形態は膝頭の突出状態のみられないものであり、膝にあたる両先端の張った三角形に近い精円形を呈するといったもので、形態的に本石仏に近いものといえる。この大永仏と本石仏の違いは、大永仏がやや偏平な形態であるため、膝張（幅）と膝深（厚さ）との比率が小さいのに対し、本石仏は膝頭から背に向かう脚部が大永仏に比べ多少長めの形態であり、さらには膝頭（幅）と膝深（厚さ）との比率が大きい。このことは僅かな差であるが、像に深みがあり、より台形に近い三角形の形態をみせることを示すものといえる。

本石仏の底部形態について、確認できる例が僅かにある。南アルプス市上今諏訪慈眼寺の薬師如来坐像（藤原期）や仁安二年（一六七）の墨書き銘をもつ北杜市長坂町（旧長坂町）浅沢妙林寺の薬師如来坐像がそれである。¹⁵これから一二世紀ごろの底盤形態は、いずれも三角形（台形）を呈するものであることが分かる。この木造仏の底部形態がどのように変化するのか、統計的資料をもつていいないので今のところ明確な答えはない。しかし、底部形態、特に背の部分が崩れ、丸味をもち、三角形に近い台形のものが、慈眼寺・妙林寺例より後の時期のものにみられるところから、おそらく木造仏自身にも、底部形態の変化があり、この変化にそつて石造仏の底部形態も変化をみせたのではないかと考えられるのである。

本石仏と、ここで取り上げた木造仏との間に、一目瞭然に大きな差がある。従つて直ちに比較できないが、本石仏が時期の確認できる延命院十二仏の大永仏にみられる形態より新しい時期のものでなく、むしろ古い時期に傾斜する可能性が強い形態であることを確認できそうである。これがら本石仏の造られた時期を、奥壁に彫られている永和二年（一二七七）の

の検討を必要とするが、今のところ一六世紀以前に造られた石仏の一つと考へてゐるものである。なお、底部形態は、本例に近い半椭円形をみせる。

このような筒状の大袖形態の袖は、江戸時代にほとんどみいだすことがでない。多少類似する形態のものもみられるが、それは袖が小さく、突出が非常に短い筒状とまではならないもので、形態に大きな違いがみられる。

一方、木造上人像などの中に、筒状の大袖形態の袖に類似するものがいくつかみられる。例えば鎌倉時代から室町時代の作とされる笛吹市御坂町（旧御坂町）黒駒の称願寺の木造阿陀阿人真教像があげられる。これは筒状ではないが、膝下まで覆う大袖が特徴的である。袖が短いものの筒状を形成するものとして、中道町円乗寺の木造役行者像（鎌倉時代）がある。

笛吹市御坂町（旧御坂町）大野寺福光園守の木造吉祥天坐像（寛喜二年・一二二三の墨書き）⁽¹⁾、郡留市郡広嚴院木造地藏菩薩坐像（明徳元年・一二二〇の墨書き）なども、両袖が筒状でかつ大袖の形態をとるもので、本例に最も類似する形態といえる。このように本石仏には、木造仏などの年代などからすると、中世の中でも、一六世紀以前の時期にみられるような要素を合わせ持つているようみられる。

もう少し違う面から、年代などにかかる幾つか検討を加えてみたい。

本例のような板状の足を脛前で安座する型式は、非常に稀なものかとみられる。県内に類例を求めるのは非常に難しい状況にあり、他の形態で、一四世紀代とされる源賴朝像や神官像などにおいても、類似するものはみられない。県内の中世木造仏は、足首を膝の上に載せる伝統的な結跏趺坐形態のものがほとんどで、大きな違いをみせる。その中で鎌倉時代とされる甲府市塙澤寺の丸彫地蔵坐像は、左足首を脛の前に突き出す半跏趺式のもので、一世紀ごろからみられる型式と考えられている。しかし、伝統的形態と違うという点では共通するが、この足首は立体的に彫られ、本例とはいささか異なるところもある。江戸時代の石仏にも、同様な形態のものが僅かに見られるが、その像容は全く違うところである。これらから考

えると、このような板状に表現される足形態は、時期を測らせる要素となるのかもしれない。

なお、安座形式の地蔵坐像は、治承元年（一一七七）・法橋■慶の造立銘をもつ、静岡県瑞林寺地蔵坐像が最古とされ、かつ筒状の大袖はこの時期前後の地蔵坐像に顯著にみられるようである。⁽²⁾

背中の中央肩近くに柄穴がみられるが、このような柄穴を江戸時代の石仏の中に確認できる例はほとんどない。柄穴の形態に多少違うところもみられるが、塙山市慶松院の普賢菩薩坐像、同市下塙後髮切塚の大口如来坐像などの背には柄穴がみられる。⁽³⁾これらは像容や彫法などからして、少なくとも塙山市竹森にある延命院十三仏のうちの大水仏（大永七年・一五一二）と同時期か、あるいはその前後の時期かと考えられるものである。また、前述の右田家墓地丸彫地蔵坐像にも、柄穴がみられるところである。

さらに、甲府市塙澤寺の丸彫地蔵石仏も、円形光背を負う形態であることから、背中に柄穴をもつことは確実なものといえよう。このように柄穴からすると、本石仏に大永以前の時期を想定することはそれほど難いことではなく、さらに鎌倉時代ころまで測る可能性も合わせ備えていることになる。

着衣に見られる、特に木葉の葉脈のような沈線文様について触れてみた。木葉の葉脈は、木造地蔵立像の腹前にみられるU字状の衣文と見られるが、本石仏は、葉脈が上方に延びる形態である。葉脈状の文様をもつ例を拾つてみると、南アルプス市野牛山（旧八田村）にある桃岳院、さらに韭崎市龍岡町下条南割にある大聖寺の丸彫地蔵立像がある。いずれも方形の台の上に付く蓮華座に地蔵像が載る形態で、同様な蓮華座が甲府城跡から出土していることから、甲府城跡の築上が開始された文保二年（一一五九二）以前の時期が想定されるものである。また、北杜市須玉町（旧須玉町）上津金にある海岸寺の寛永四年（一一七七）の紀年銘をもつ二尊地蔵石仏にも、葉脈状の文様がみられる。従つて桃岳院、大聖寺例は、一尊地蔵

第3図 地蔵像底部銘文拓影

小笠原

加賀美氏
卯月立

この底の銘文については、先の『甲斐国志』中にその記述は見られない。

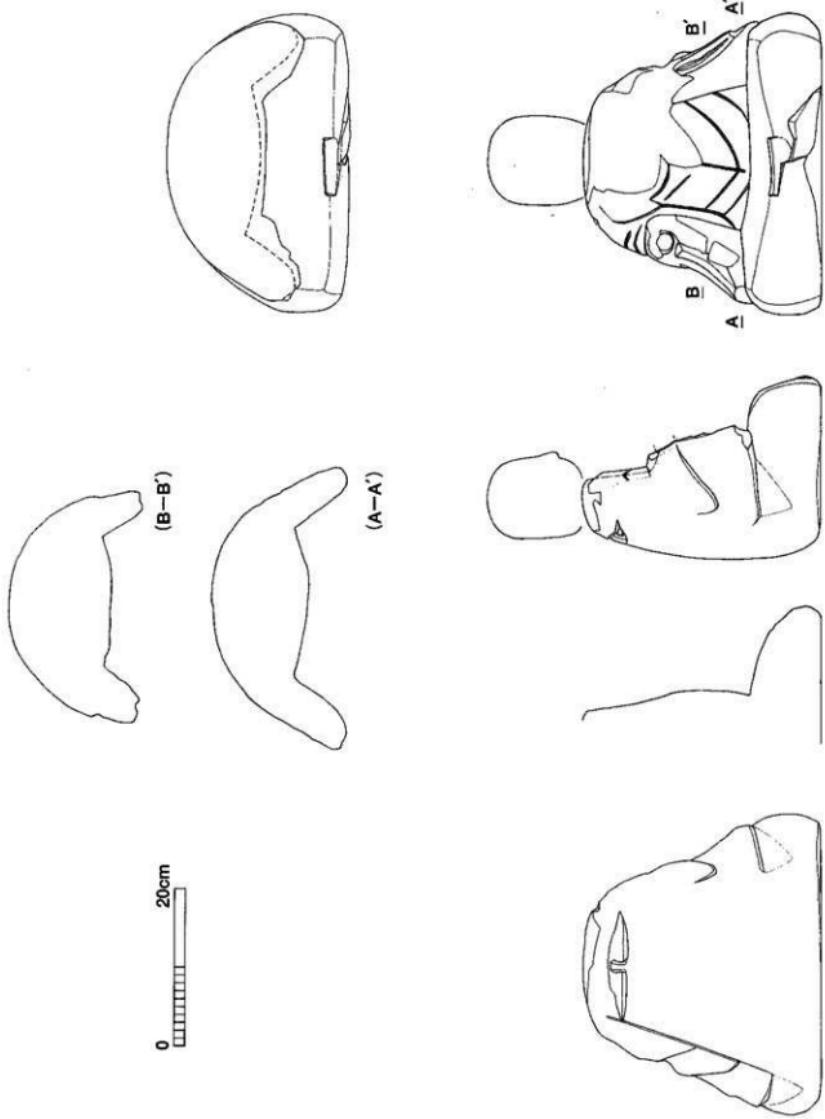
その後の『東八代郡誌』（山梨教育委員会東八代支会、大正二年刊）には、整面の銘文のほかに、「其の下底に「為加賀美氏小笠原卯月」と記述されている。同様に昭和一年に作成された『古墳台帳』（県教育委員会）にも、「東八代郡誌」と一字一句違わない記述がある。だが、「立」の文字はどうやら落としており、今回初めて確認されたことになる。このことは別として、右面の銘文と右仏の底の銘文とには、「甲斐国志」と「東八代郡誌」、「古墳台帳」との間に確認された時期に違いのみされることになる。

この銘文の文字の縁は摩耗せず明瞭に残るが、これは底部という彫られた部位からすれば当然のことといえよう。そして、この差のとおり底部銘文が江戸時代以降に彫られたのか、『甲斐国志』に確認されていなかったのか、あるいは取り上げられなかつたのか、明らかにすることはできない。しかし、既に述べたように小笠原常磐が、加賀美氏と深い係わりをもつてることを、表していることは確かであろう。

右仏の形態は、これまで県内で確認されている中世石仏（一六世紀）の形態との間に、多少相違するところもみられる。しかし、袖および足、袈裟模様の袖の形態には大いに違いが認められることから、相対的には別形態といつてもよきそのものといえる。まず筒状の大袖形態の袖であるが、県内これまでに確認されている中世石仏（一六世紀以前）の中に、本例以外に一例の存在が知られる。北杜市明野町（旧明野村）上手藤田の、有田家墓地に所在する丸彫地蔵坐像である。^(二)両袖が筒状の大袖形態で、両手を屈臂する。右手は錦杖を執るものと考えられるが欠損しており確認できない。左手は宝珠を捧げる形態である。有田家墓地丸彫地蔵坐像は、今後

裾から肩当たりの袖穴端まで延びる段差で区切られる。

右仮の底の形態は、膝頭の突出状態はみられないが、やや膝の張った三一角形に近い精凸形態をみせる。右仏の底には、既に一部で触れてきた次の文字が、三行にわたり彫られている。



第2図 地蔵塔地蔵石仏

年（延徳二年・一四九二）の月待板碑には「右志依月待特殊神」⁽³⁾とあり、これらはいずれも定形句による銘文の書き出しである。本例は書き出で

ないものの、同様な定形句といえるものであろう。時期として貞和から福徳（延徳）年間のものであるが、その後に悉皆調査されている甲府市、並

崎市、塩山市、北杜市須玉町（旧須玉町）などの江戸時代の石造物の中に

全く確認されないことから、より古い時代性を示すものといえるもので、一般的には中世にみられる形態と考えられるものである。

これ以外の定形句として、県内では「奉為」も知られている。北杜市須玉町（旧須玉町）にある長泉寺の

文安三年銘（一四四六）の名古板碑には、「奉為時阿弥陀仏」⁽⁴⁾とある。「右志者」も「奉為」も比較資料としては少ないもので

あるが、この両者を比較する限り「右志者」の定形句が先行するよう

り古い形態ともいえるようである。

次に「大禪定門」の時期的整合性について考えてみたい。県内における支配者層の戒名を「山梨県史」などから拾つてみると、この時期ころの戒名として人居士と大禪定門などを確認できる。本例にかかる大禪定門をあげると、次のようなものがある。

武田信義（一二二八—一八六）願成寺殿崎照國公大禪定門

武田信武（？—二五九）清淨心院殿雪山照公大禪定門

武田信成（？—三九四）繼院殿雪忍光公大禪定門

武田信綱（？—一五〇七）長興院殿浮山建邦大禪定門

武田信景（一五四九—一五八二）英智智雄大禪定門

このように、「大禪定門」なる法名については、文献の上から銘文にみられる永和年間前後の時期にその存在が知られ、時間的整合性は確保できるものといえる。

文献以外で「大禪定門」について確認できるものに、僅かであるが石造物のなかにみられる確かな例がある。

奉為

永昌院殿燐山勝公大禪定門

神儀立馬

永正二年

これは、山梨市落合の永昌院にある宝篋印塔にみられる銘文で、位牌や文書以外から確認できるものである。前述した、定形句の一つである「奉為」の書き出しで始まる武田信昌（一四四七—一五〇五）の供養塔で、永正二年（一五〇五）に造られたことが明らかである。この年代は本地藤右仏に想定している時期より遙かに新しい時期のものであるが、一六世紀初頭にはその存在を確認できる。また、神位、大覺位などといわれる「御神儀」なる文言は江戸時代にもみられるというが、今のところ県内の江戸時代の墓石で実見できるのは寛永年間の一例に過ぎない。⁽⁵⁾ 逆に江戸時代以前において、本奥壁例と永昌院宝篋印塔例とに共通する文言の存在を重要視したい。これらのことと、先の法名での状況を勘案すれば、これらの時期において、本奥壁例と永昌院宝篋印塔例とに共通する文言の存在を重要視したい。これらのことと、先の法名での状況を勘案すれば、これらは時期以前に存在したとしても、それほど違和感はないものと考えられる。相対としては、中世の時期に彫られた銘文と考えておきたい。

（二）石仏

銘文については、今後さらなる検討を必要とするが、次に石仏からどのような状況が導き出せるか検討を加えてみたい。

石室に安置されている石仏は、安山岩製で、頭髪等を欠損している。体部は肩が撫で肩で、肘あたりで少し窪む台形状の形態である。石仏の両手は、屈臂して同じ高さで前方に突き出す形態である。しかし、両手とも手首以上を欠損しており、どのような印相なのか、印相を結ばないならばどのような持物をもつか全く不明である。両手の袖は、大きな板状あるいは筒状に彫られ（以下筒状の大袖）、袖口の断面がV字状に彫り窪められ

「信清、屋代余三、八代冠者、依有病逐電、依無子以長清子四郎長光、相続八代、八代与冠者、長清遠光の次男、米倉弥太郎、奈胡十郎孫信光の兄」とある。さらに尊卑分脈には小笠原長清の四男に八代四郎長光其子長繼とあり、この長繼の子孫が奴白氏という。その後、再び子孫が絶えたので、甲斐守護の武田信重の庶子伊予守基繼が再興して、八代または奴白四郎を繼承したという。

奴白氏といえば、同町北の旧能成寺跡地から建武五年（一二三八）、貞和五年（一二四九）、延文五年（一二六〇）、応安六年（一二七三）、永和二年（一二五九）といった南北朝時代の年号や、「保智禪尼」、「聖禪禪尼」、「本任大師」、「道義禪門塔」、「承禪門」、「右勸行□修善根云々」といった法名や造立題旨などの刻まれた五輪塔がみつかっているが、この五輪塔は奴白五輪塔とも呼ばれており、また、この旧能成寺跡地は八代氏あるいは奴白氏の居館とも考えられている。さらに紀年銘は全て北朝方の年号であり、これらから石塔にかかわる人物たちが、北朝方に深くかかわっていたこととも合わせて確認できる。また、この状況は、この地域でのその勢力の大きさや、安定していたこと、また、短期間の造立に南北朝という世相をも窺える。かつ、本石塔の造立推定年代と極めて切迫した時期関係にあり、その造立の背景としては十分なものがあつたといえる説で、指呼の間の造立からすれば、八代氏關係を想定するのが最も無難といえよう。

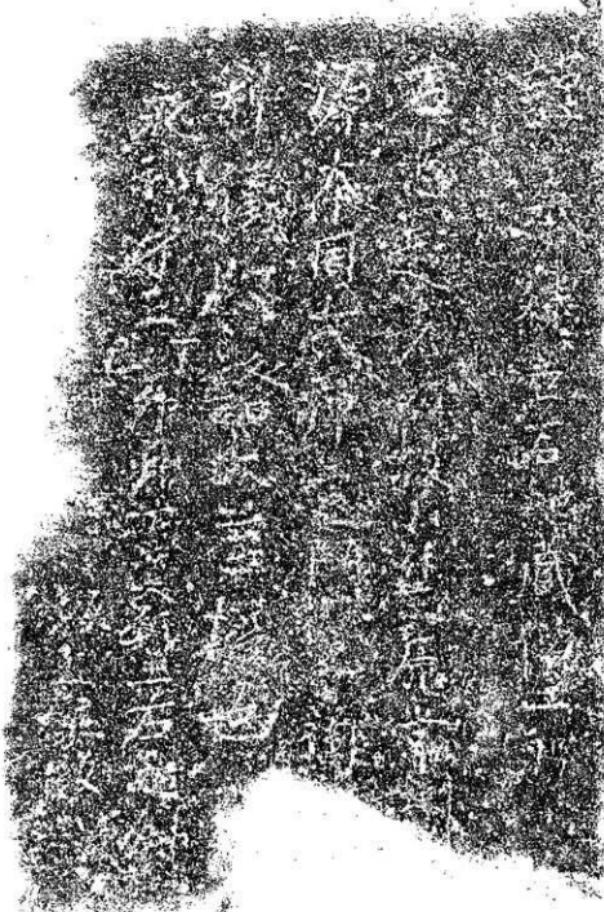
これらの中に、奥壁の銘文にみられる「小笠原常源」を直接窺う資料はみられない。だが、奴白氏、八代氏のいずれにしてもその先祖を辿ると、そこに逸見清光を祖とする加賀美遠光、あるいはその子小笠原長清に到達する。石室の銘文には加賀美氏の標記はみられないが、建立したとする地蔵像の底に「加賀美氏」の名がみられることから、これらは一連の中で解釈することが妥当なところであろう。すなはち、石室あるいは後述する石仏底部にみられる「小笠原常源」あるいは「小笠原」、「加賀美氏」は、ま

さに先祖とのかかわりを示すものといえよう。このうち「加賀美氏」は、直接的に「小笠原氏」の先祖に結び付くものである。また、「小笠原」については、加賀美氏の子の小笠原氏の根拠地である地名を指すものと考えているが、地名で無いとしても小笠原氏とするか、「小笠原常源」を指すもののかのいずれかであろう。従つて、その繋がりがどのようなものか定かにならないが、いずれにしても「小笠原常源」については、小笠原長清に連なる子孫であつて、先に述べたように八代氏の後裔とするのが無難などと/or>ころであろう。

八代氏は、その後再び子供が無く、先に述べたように武田信重の庶子伊予守基繼が再興したとされるが、その再興の時期については、武田信重が予守基繼が再興したとされるが、その再興の時期については、武田信重が末質の甲斐守護となつた永享一〇年（一四三八）から、没した宝徳二年（一四五〇）までの間と考へるのが妥当なところで、これは石室に彫られた永和三年より遙かに後のこととなる。従つて奥壁などにみられる小笠原氏は、武田信重の守護職就任へ力を貸した信濃小笠原氏ではなく、加賀美遠光とその子長清以後、子孫が信濃に移り住むが、この時以後も甲斐につた小笠原長清系の子孫とするのが自然かと考える。

一方、大原主の右近副坂上家政については、小笠原常源も含め県内の中世史上に未だその名を見いだせない。このことが、追刻といわせる要素の一つともいえるが、右近副坂上家政については「八代町誌」にいうように長繼の子孫か、あるいは八代氏の被官の氏族とするのが妥当なところであろうか。さらにもこの時期は、中央の有力氏族や有力寺社との関係が深く、また、「坂上」といえば祭司的系譜に連なる氏族とみられることなどから、その関係者などについても検討の余地があろうかと考えられる。

次に銘文にかかわる幾つかの点について触れてみたい。まず、銘文にみられる「右志起者」は、県内の石造物に幾つか確認できる。例えば甲府市湯村塩澤寺にある貞和六年（一二五〇）の阿弥陀・尊種子板碑には「右志者相向當莊・・・」、また甲斐市（旧敷島町）牛久の長光寺にある福徳一



第1図 奥壁銘文拓影

この銘文については、「甲斐国志」に「當中ノ石面ニ刻字」として、壁面に刻まれている前掲の全文が収録されており、少なくとも「甲斐国志」の作られた江戸時代かそれ以前の時期に、既に彫られていたことが明らかといえる。この銘文の内容は永和第三年に、法名が本周大禪定門である小笠原常源という人物に対して、一体の地蔵像を建立、仏道の真理を会得して仏果を得ることを、右近居坂上家政なる人物が大願上となり、供養したことを記したものである。小笠原常源が具体的にどのような人物なのか不明だが、奥壁にみられる永和年間前後の八代町地域の状況などについてまず触れ、そこから多少の人物像に触れてみたい。

謹奉建立石地蔵像一軒
右志起者故為小笠原常
源本周大禪定門之御
神儀頌詔大菩提也

永和第二丁卯月廿日大願主右近居
坂上家政

八代町地域は、「和名抄」にみられる「八代郷」がその地名の起りである。応保二年（一一六二）の八代荘の停廢事件をめぐる「長寛勘文」で、つとにその名の知られた莊園の所在地である。その後について「八代町誌」によれば、八代町には、甲斐源氏の祖で北巨摩郡地域を根拠地とした逸見清光の九男信清が、源氏挙兵の治承四年（一一八〇）までに入り、八代信清を名のつたとされている。この八代信清について寛政系図には、

つてゐる。

山梨県の中世石仏

—地蔵塚地蔵石仏—

一はじめに

山梨県内における中世石仏は、近年つとにその数を増してきている。そ
の種類をあげれば、最も多くの数を確認できる重制の六地蔵石幢以外に、
陽刻地蔵板碑、陽刻六地蔵板碑、一石二仏六地蔵石仏龕、阿弥陀如来・地
藏石仏（光背形）、丸彫地蔵、阿弥陀如来立像、丸彫阿弥陀如来・菩薩如
來・地蔵坐像、一二仏などがある。特に坐像については、大永銘をもつ嵐
山市延命院の一二仏の発見が大きな契機となり、以後、同様な形態の石仏
が県内で確認されるようになった。

しかし、これまでに確認された石仏の多くが、中世の時期の中でもその
後半代となる一五世紀末から一六世紀代といった新しい時期のものであ
る。逆に以前の石仏はどういうと、紀年銘は無いがその像容から平安時
代後期（藤原朝）とされる垂崎市極楽寺阿弥陀石仏坐像（光背形）、同様
に年号等の銘文は無いが、やはり像容などから次の鎌倉時代とされるもの
に、「厄除け地蔵尊」として深く信仰されている甲府市湯村塙澤寺の丸彫
地蔵坐像（県指定文化財名）=石造地蔵菩薩坐像）、同南部留都秋山村吉祥
寺の地蔵石仏（光背形）などがあげられる。これらのなかには、今後さらに
検討をするものもあるが、それを踏まえても中世前半代に位置づけられ
るとみられる例は、このようにごく僅かなのが現状といえる。

今回取り上げた地蔵塚石仏は、前述の年号から数少ない中世前半代に位

一はじめに

二 地蔵塚地蔵石仏の概要と年代 四 おわりに

二 石仏形態

置付けの可能かと考えられるものである。また、像容はこれまでに確認さ
れている形態と異なるもので、新たな形態の存在を考える上で重要な資料
となる。しかし、「圓通」と述べたように、年号が直接石仏に刻まれて
いるわけではなく、安置されている古墳の奥壁に彫られた年号に注目した
結果であり、一方では、これは逆に、追刻の可能性も指摘されていると
ころである。中世であることは像容から間違いないところと考えているが、
ではいったい中世の像容としてどこまで満りえるのか、以下検討を加えて
みたい。

二 地蔵塚地蔵石仏の概要と年代

(一) 奥壁の銘文

地蔵塚地蔵石仏は、笛吹市八代町（旧八代町）南にある地蔵塚古墳の横
穴式石室の中に安置されている。この古墳は、古墳時代後期に造られた円
墳で、その石室は全長一〇、〇一メートル、奥壁幅一、四メートル、高さ
一、二メートルと、県内第五位の大きさを誇る大型石室である。この石室
の奥壁は、広口積み、三段五枚組の形態で、このうちの、中段の一枚石
(花崗岩)の向かって左側の半分ほどに、いづれも五センチメートル四方
ほどの大きさで、かつ二ミリメートル前後の非常に浅い文字で次の銘文が
刻まれている。なお、現在、銘文的一部分に、緑色の塗料が塗られてしま

研究紀要1号～20号執筆一覧

- 1号 坂本美夫 甲斐の都（詳）郷制
新津 健 金生遺跡発見の中空土偶と2号配石
小野正文 繩文時代早期・前期初頭の土器について
- 2号 保坂康夫 山梨県下の先土器時代史料の検討－1－
小野正文 所謂円錐土偶について
新津 健 石劍考
－中部・圓東を中心とした出土状況から－
中山誠二 甲斐における弥生文化の成立
坂本美夫 社立具・雲珠考
- 3号 長沢宏昌 繩文時代前期末～中期初頭の土器底部にみられる繊物痕について
田代 孝 山梨の三角彫形土器品
末木 健 甲斐国巨麻郡の成立と發展
坂本美夫 甲斐国府－その環境と展望－
笠原友安・藤沢 浅 上の平遺跡住居跡から出土した炭化穀子の同定
長沢宏昌・中山誠二 笠原・藤沢報告付記
- 4号 長沢宏昌 山梨県内出土繩文土器底部庄庭の研究
中山誠二 弥生時代末期における上の平遺跡の集落構造
小林宏和 繩文時代の土墳について
- 5号 末木 健 甲斐仮教文化の成立
森 和敏 甲府盆地における条里型地割の事例
- 6号 渡利 司 絡条体庄痕文を有する土器について
－中込遺跡出土の資料を中心に－
森原明廣 関東地方におけるカマド初現をめぐって
保坂康夫 立石遺跡発掘調査報告－1989年国道358号線拡幅等に伴う調査
河西 学 立石遺跡での先土器時代遺物を包含する地層
- 7号 中山誠二 身洗沢遺跡における外来系土器の諸説
今福利恵 身洗沢遺跡出土の木製品
千野祐道 身洗沢遺跡出土木製品の樹種について
松谷裕子 身洗沢遺跡出土植物種子について
外山秀一 山梨県身洗沢遺跡の立地環境と稻作
- 8号 新津 健 金生遺跡出土の上器I（後期）
出月洋文 両の木神社遺跡出土の須恵器長頸瓶について
岡島信男・河西 学・保坂康夫 山梨県甲府市相川河床から発見されたナウマンゾウ白匂化石について
松谷裕子・長沢宏昌 明野村中村遺跡神道跡出土炭化物について
- 9号 碓貝正義 いわゆる東国造について
保坂康夫 繩群と個体消費の関わりについて
今福利恵 繩坂式土器成立期の集団關係
新津 健 中期後半の集落②
－千葉県高根木戸遺跡の分析－
末木 健 繩文時代生活活動と石器組成分析
中山誠二 甲斐弥生土器編年の現状と課題
－時間軸の設定－
小林健二 外来系から在来系へ
－半圓のS字彫の変遷－
森 和敏 柱の礎石のある豎穴式住居跡
森原明廣 山梨県地域における内耳土器の系譜
平山 優 甲府城の歴史的位置
- 坂本美夫 一印斐国戰農期研究序説－
山梨県における月待ち信仰について
－特に石造物の展開を中心として－
10号 長沢宏昌 甲府盆地周辺にみられる繩文時代中期の土器墓と土器器皿再葬墓
－井戸尻Ⅱ－曾利Ⅰ式湖の場合－
五味信吾・野代幸和 山梨県大泉町甲ヶ原遺跡出土琥珀の产地同定（1）－赤外吸収スペクトル分析－
新津 健 金生遺跡出土の土器II
高橋みゆき 山梨県東八代郡中選町金沢出土の土師器尾
- 11号 宮原 学 繩文時代の石器再考－打製石斧（1）－
田代 孝 中世六十六部盟の事納経筒について
柏木秀俊 近世軒平瓦の分類について
－甲府城を例にして－
高野玄明 県道塩平～塩平線並軒工事に先立つ牧丘町曲田遺跡調査報告
小野正文 中甲府市八幡神社採集の繩文土器
- 12号 坂本美夫 剣菱形杏葉類の階層性とその背景
古岡弘樹 繩縄古墳についての予察
柏木秀俊 近世軒平瓦の分類について
－甲府城を例にして－
佐野和則 山梨県内考古資料の教材化
－学校現場へのアンケート調査に基づいて－
沢登正人 歴史教育実践と考古学の関連についての・考察
－考古学の成果を取り入れた授業から考えたこと－
大谷満水 ユング心理学を導入した繩文時代の渦巻文の解釈
- 13号 田代 孝 近世の回回人と回回納経
長沢宏昌 都留市中谷遺跡出土の繩文土器底部庄痕について
保坂康夫 山梨県下の遺跡・住居跡数箇変動と通史的理解
大庭 康 考古資料の教材化についての・考察
- 14号 新津 健 山梨における後期土器の展開
山本茂樹 清里ハイバス第1遺跡の階層・穴の若干の考察
森 和敏 I基の前方後円墳の設計－山梨県における一
野代幸和・鈴木由香 八代町塙加寺遺跡および山梨市七日子（光寺）遺跡出土遺物について
石神孝子 甲斐における古墳時代中期の墓制について
－曾根丘陵の円形低壇墓－
- 15号 丰 映福 長江デルタ地帯における新石器時代文化集団の
移動及び地域文化への影響
野代幸和 繩文時代前期後半から中期初期段階における異
系統土器流入の様相について
－山梨県に見た出土事例を中心－
市川恵子 繩文時代前段階土器から中期河童型土器へ
－御坂町桂野遺跡出土土偶に関する一考察－
新津 健 繩文晚期後半過渡分分布の意味と問題
－山梨県における遺跡の継続性と立地から－
山本茂樹・網崎邦夫 甲ヶ原遺跡発掘調査報告
(平成10年3月3日から3月26日)
小林公治・吉川純子・橋本岳二 大月遺跡から検出された動
植物遺体とその性格(1)
笠原みゆき 大月遺跡の敷石住居について
保坂康夫 御動使川扇状地の六地形と立地
－中部横断道試掘の結果から－
河西 学 中部横断道試掘調査のテラフア分析
小林健二 塩山市西田遺跡B区2号住居跡出土土器の再整理

- 石神孝子 山梨県牧洞寺占領探集の須恵器について
雨宮加代子 山梨県内出土木製屋について
沢田哲 甲府城の鬼門守護と除災招福の思惟
一橋荷曲輪にみる一考察一
坂本美大 高根町立花檜森前庭地所在の地蔵園刻板碑
坂本美夫 山梨県における月待信仰について
一文献を中心として一
- 16号 長沢宏昌 山梨県における縄文時代早期木の様相
一国内地域と都内地域一
小林公治・中野益男・中野寛子・長田正広
磨石・鉋石・石臼と投注土器の使用方法に関する一事例
一大字遺跡出土绳文土器・石器に対する脂肪酸分析結果と考古学的検討一
野代恵子 方形周溝基にみられる葬礼的墓塞に関する一視点
一境川村調査房遺跡の事例より一
保坂康夫 東原遺跡の平安時代墓集落の構造
一古代年代輪の設定と墓集落象徴論の試み一
野代幸和 横森赤台（東下）遺跡出土五輪塔の形態と製作年代について
宮里 学 県指定史跡甲府城跡の地錠祭振
一数寄座腰手門周辺の遺物集中地点とその意味一
雨宮加代子 考古博物館カルチャーラク「銅鏡づくり教室」での銅鏡の製作について
坂本美夫 山梨県における月待信仰について
一塙山市小屋敷の二十三夜堂を中心に一
- 17号 三森哲治 遊々木本遺跡の七馬と上馬祭祀の起源
宮久保真紀 甲府城における一条小山の選地について
一歲風得水の思想と甲府城一
保坂康夫・望月明彦・池谷信之 黒瀧石原産地と石材の搬入・搬出一丘の公園第2遺跡の原産地推定から一
三田村美彦 山梨県における早期沈文土器群後半の様相
田口明子 弥生時代の大形打石斧は農耕具か
一山梨県出土事例をもとに一
依田幸浩 御動使川扇状地北部の築堤展開について
一大塚遺跡・石橋大塚遺跡をを中心に一
小柳美樹 大塚遺跡における削面石器への理解
一「中国四川省古代文物展を通じて」一
吉岡弘樹 塩湖下原遺跡出土の釣手土器について
湯川秀一 埼玉文化財センターが行う学校への教育活動に関する一考察
「総合的な学習の時間」にどのように対応したらよいかー
田中宗博 発掘調査と平行した資料普及活動に関する一考察
坂本美夫 山梨県における中・近世石塔資料
- 20号 保坂康夫 天神堂遺跡の礎群・配石
渡辺誠 人面・土偶像飾付有孔彫付土器の研究
小林広和 湯巻把子状装饰土器の末裔
今福利恵 甲斐國巨麻部における古代牧についての一視点
坂本美夫 山梨県の中世石仏
一六地蔵石幢（単制）一
- 18号 新津龍 縄文中期鉤手土器考②
笠原みゆき 塩湖下原遺跡出土の敷石住居跡について
三森鉄治 山梨県内における出土銅貨の現状と課題
小林慈 鰐沢河岸點出土の漁網子について
宮久保真紀 甲府城内葡萄酒醸造所について
一国産ワインの発祥地甲府一
樋泉岳二・小林公治 大月市大月遺跡（第7次調査）出土の動物遺体
興水達司 横針前久保遺跡出土黒瀧石のフィッシュントラック年代測定
坂本美夫 山梨県の中世石仏
一地蔵石仏（光背形）を中心として一
19号 保坂康夫 台形様石器にみられる「急角度微細加工」の実験的検討
三田村美彦 山梨の縄文時代早期沈文土器群末期前後

2005年3月31日 発行

研究紀要 21

編集・発行 山梨県立考古博物館
山名県埋蔵文化財センター
東八代郡中道町下曾根923
TEL 055-266-3881・3016

印 刷 株式会社 アド井上

BULLETIN
OF
YAMANASHI PREFECTURAL
MUSEUM OF ARCHAEOLOGY
&
ARCHAEOLOGICAL CENTER
OF
YAMANASHI PREFECTURE
NUMBER 21
CONTENTS
MARCH 2005

A Study of Jomon Age Lamp-Shaped Vessels Anthropomorphic Decorations : 2	Makoto Watababe	1
The Ancient Province of Kai and Kawachi , and Horses in the Provinces	Takeshi Sueki	7
A Study of Ancient Pasture in Yamanashi,Yatsushiro and Tsuru county , Kai Province	Rikei Imafuku	13
The Medieval Stone Figure of the Buddha in Yamanashi Prefecture		
—Jizo, a Stone Figure of the Buddha, on Jizo Mound—	Yoshio Sakamoto	38(1)